

---

# 海辺の国の王女

富樫 聖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海辺の国の王女

### 【Zマーク】

Z1561Z

### 【作者名】

富樫 聖

### 【あらすじ】

海辺の国を統べる美しく気高い王女アルヴァーナ。彼女はあるとき、海辺で祈りをささげている美貌の神官と出会い。彼の祈りになぜか安らぎを覚える王女。祈りを聞きに彼の元へ通ううちに少しずつ変化していく二人の関係。孤高の王女と感情に深い神官が出会い、伴侶となるまでの物語です。本編完結済み。思い出したようすに番外編を書くかもしれません、一応完結済みとさせていただきます。

## プロローグ

ポロロン。

夜の酒場の喧騒の中、一人の吟遊詩人の若者が、その豎琴の弦をひとかきならした。

細い指が軽く触れただけの弦は、しかし美しく確かに音を、辺りに響かせた。

ざわめきがぴたりと止む。

琴の音に勝るとも劣らずの美しさを持つ、その吟遊詩人の若者は、人々の意識を自分に向けさせることに成功してか、満足そうな笑みを浮かべた。青みがかつた銀の髪と、深い青色の瞳を持つ青年が、その秀麗な顔を綻ばせただけで、その美しさに酒場の男たちはハツと息を飲んだ。

「皆様」

男が笑みを浮かべたまま、言つ。

「酒の席の余興に、一つ私に物語を語らせていただけませんか?」

「おう、ぜひとも」

「語つてくれ、吟遊詩人」

「英雄の話か、それとも戦士が美しい姫を得る話 か?」

荒くれの男たちの口々の要望に、豎琴を手にした青年は、ますます笑みを深めた。

ポロロン。弦をかきならす。

「いいえ、皆様、これはある南の海に面した国の、美しい王女の話ですよ。

『ある国に、美しい王女がいた』

『その姫は、誰よりも美しく、誰よりも賢かつた』

昔々の話です……

ポロン……ポロン……

## プロローグ（後書き）

昔書いた小説です。

気高く綺麗な王女様が書きたくて書きました。

ある国に、美しい王女がいた。

その気高く誇り高い王女を、人々は彼女の黒い髪と黒い瞳にちなんで、『夜の宝石の王女』と呼び、敬っていた。

その彼女を得ようと、国中の若い貴族や近隣の国の王や王子がござつて求婚したが、王女は誰一人として相手にしなかつた。

ある日、王女が部屋の窓辺に坐つていると、妙な音が耳に入ってきた。

遠い音だ。話し声ではない。だが、話し声にも歌のようにも聞こえた。

しばらく耳を傾けていた王女は、

「……ああ、祈りか……」

つぶやき、ふと興味を覚えて窓の下を覗き込んだ。  
祈り、というのは、特殊な魔詩のことだ。

誰にでも歌えるものではなくて、それが許されるのは、国の主神ヴァルメーダに仕える神官のみである。

王女は今まで何度か、大神官が神事の時に歌つていたのを聞いたことがあった。

不思議な音律。

聞いている者を魅きつける、不可思議な、力に溢れた詩。  
声の主はすぐに判つた。

城の建つ、切り立つ崖下の海岸に、打ち上げられたらしいう大きな岩の上に坐つている男がいた。辺りに人影はない。間違いなくその男だ。

男の髪は日に当たつて、きらきらと金色の光を反射していた。きっと金髪なのだろう。

どういった男なのだろう?

「王女様、いかがなされました?」

ちょうど、部屋にお茶を運んできた侍女が、窓から身を乗り出して外を眺めている主を見て、あわてて尋ねた。

「祈りが聞こえるんだ。ほら、あそこの岩にいる男が、海に祈りを捧げている」

王女は振り返ることすらしない。侍女は多少はらはらしながらも、王女の言葉に耳をすませた。

「いいえ。私には何も聞こえませんが」

「そうか？ 私には確かに聞こえるんだが」

侍女は今度は、王女の隣に立つて、下を覗いてみた。余りの高さに眩暈すら感じる。

「確かに人はいるようですが……。王女様、よく男だつて判りますね。ここからは米粒ほどしか見えませんのに。でも髪は長そうですから、女かもしまれまんわ」

主人に似て、ずばずばと言つてしまつ侍女は、窓から体を離すとあっさり言つた。

「いや、あれは男だ」

王女は断定して、窓から離れた。

「あら、王女様？ どこへ行かれますつ？」

扉に向かつて颯爽と歩いていく王女に、召使は慌てて追いながら声をかけた。

「下に降りてみる。……ああ、一人で大丈夫だ。すぐそこだから」

途中で幾人かの制止を振り切り、城を出ると、海岸へ続く不確かな路を、王女は軽々と降りていった。

男はまだそこにいて、祈りの言葉を海に捧げていた。

王女はなるべく音を立てないようにそつと近づいて、岩の下にたどり着くと、自分の背の半分以上もある岩の上の男を見上げた。

男は若く そして予想通り神官だった。

黒く長い衣に、神官特有の白い衣を重ね着し、そのゆつたりとし

た上衣に位を表す布で腰を縛っている。

この国の主神、ヴァルメーダに仕える神官達。

男はしかも、高い位にいる者ようだつた。

腰に着けているサツシユの色は真紅。大神官に次ぐ、高い位おそらく神官長か、大神官補佐だらう。

その若い神官は、王女 人がそばに来ているのを当然判つてゐるはずであるうに、身じろぎ一つしないで、海に向かつて淡々と祈りの言葉をつぶやいていた。

なんだか居心地悪くなつて、ためらいながらも王女は、彼女にしては自信なさげに声を掛けた。

「お前は、そこで何をしている……？」

神官は、そこで始めて人がいるのに気づいたように言葉を切り、ふり向いて王女を見下ろした。

切れ長の青い瞳は冷やかだ。

顔には表情が無く、その秀麗な美貌は、人にぞつとさせめるものがあつた。

瞳にも表情にも、何にも表情を浮かべずに男は、

「祈りを捧げておりました。王女様」

抑揚のない、けれど不思議と澄んだ声を口から漏らした。

彼は、王女を知っていた。

だが、その口調も表情も、自國の王女に普通向けられるものでもなかつた。

石像と向き合つてゐる氣分だ。王女は思った。いや、もしかしたら、石像の方がまだ表情があるかもしれない。

バツの悪い思いをしながら、

「……そうか。邪魔して悪かつた。続けるがよい

「はい」

若い神官は、再び海の方を向いて、祈りの言葉を歌いはじめた。

王女は黙つてその声を聞いた。

不思議な、音律。

神官が祈りに使つ言葉は古代語であり、王女をえその言葉の意味をみく知らなかつた。

それどころか、神殿にいる神官も、その意味をよく判つてゐる者はめつたにいならし。したがつて、神官の口から漏れる魔詩は、王女にとつてはまったく未知の言葉であつた。

ただ言葉の端々に、海という単語が聞こえ 古代語の中でも現代まで続いている単語もあるのだ 神官が言つてゐるのは、海に捧げる祈りだということだけは、判つた。

祈りはさざ波の音に混じり、引いては寄せ、引いては寄せる、静かな滑らかな旋律が、王女の耳に心地よく響いてきた。

前に聞いた、大神官の海の祈りとは、全く違うものに聞こえてくる。

違う祈りだろうか。

いや、同じに違ひない。違つて聞こえるのは、このわけのわからない若者の口から出でているからなのだ。

王女は不意に思った。

この男にとつて、私は居ても居なくても同じなのだ。

王女であるのに、いや、そんな事はどうでもよくて、たとえ王女であつてもただの町娘であつても、この男の祈りはかわらない。自分がここにいなかつた時と同じように、歌つてゐるではないか。一瞬、自尊心が傷つけられたような気がした。

だがそれは、ほんの一瞬のことと、王女はそんな神官の態度が好ましいようと思えてきた。

王女には両親がいなかつた。

王と王妃は数年前に続けて亡くなり、まだ十六であつた王女の肩に否応なく国家の責任が掛かつてしまつたのだ。

皆が彼女を王として扱つた。王たることを望んだ。

それをつらいと思つたことは無かつたが、やはり重荷なのだろう。時には何も彼も嫌になり、早く亡くなつた両親を恨みたくなつてしまふ時もあつた。

だが、逃げはしなかった。逃げだしてしまっては、放棄してしまうのは、王女の自尊心が誇りが、そして断固たる強さが、それを許さなかつた。

王女は強い意思で政治に望み、聰明さとその美貌で、近隣の国々にその名をはせた。

私は王女であり、そしてこの國を守らなければならないのだ。王女はいつもその誇りを胸に刻み、これまでやつてきた。

しかし

この若い神官の祈りの前では、王女は王女ではなかつた。耳を傾けていると、肩の力がフツと緩んで大きく息をつける気がした。

若い神官は、王女が居ることは判つてゐるのに、何も無いかのように、静かに祈りを捧げていた。

おそらく、この神官にとって私は、海岸に立つてゐる娘の一つの「ちなの」だらう。

そう考えて王女は、自分のこの考えが氣に入つて、くすくす笑つた。

やがて遠くで寺院の鐘が鳴つた。

途端に神官の祈りの声が途絶えて、王女は残念に思つた。

もう終わりなのか……、と未練たらしく思つてしまつ。物足りない氣もした。

神官は、坐つていた岩から軽々と地面に降りて、王女の前に立つた。

真正面から捕らえると、その神官の表情の無機的な冷たさが、いつそう際立つて見える。

それに輪を掛けているのは、秀麗なぞつとするほどの美貌。海よりも深いその双眸を、そつと伏せて、彼は軽く頭を下げ、王女が受けるべき敬礼をした。

その瞬間、王女はただの石ころから、王女に戻った。

「そなたの名は？」

威厳を持つて、王女は尋ねた。

だが彼は恐れ入った様子もなく、変わらず淡々とした表情のまま告げた。

「エディアール。神殿の神官長をしております」

「……祈りは、終わったのか？」

「はい」

「そう……か」

もつと聞いていたかった。と王女は残念に思う。

「そなた、いつもここで祈りを捧げているのか？ 今のは、海の祈りだろ？」

「はい。そうですが、今日はたまたま気が向いて海に出ただけです」

王女は内心、ため息をついた。

つまり、いつもは神殿の中で行っているというわけである。

それでは聞きたいと思った時は、神殿まで行かなければならないではないか。

「どうか。邪魔してすまなかつた」

くるり。王女は城に帰るべく神官に向けた。

そして岩の道を登りはじめる。

が、ふと思いたつて、振り返り、まだそこに居た若い神官に声を掛けた。

「一つ聞くが、そなた、なぜわざわざ海へ出てきたのだ？」

尋ねられた神官は、その冷やかな目を王女へやつて、無表情のまま答えた。

「海へ祈りを捧げるためです。王女」

感情のかけらもない口調と声。王女は無言で苦笑を返した。

気の聞いた若者なら、こういう場合、「王女のために祈りを捧げておりました」という言つただろう。

少なくとも王女の存在を無視した言葉は発しなかつたはずだ。

だが、この若い神官は、王女の名の字も出さない。ヴァルメーダ  
神に仕える高僧の自尊心から出た言葉でもなく、王女を、王家を恐  
れない態度の現れでもない。そのままの事を言つただけなのだ。  
それが王女を苦笑させた。ここまで無視されるといつそ小気味よ  
い氣さえしてしまつ。

どうやらこの若者は、王女のプライドを全く刺激しない人種らし  
かった。

「おもしろい男だな。お前は」

そう言つて、王女は再び神官に背を向けると、道を歩き始めた。  
今度は、振り返りはしなかつた。

王女は窓の外を眺め、ため息をついた。

あれ以来、海での神官を見かけることはなかつた。本当に、たまたま海へ出掛けただけだつたらしい。

別に会いたいと思うわけではなかつたが、あの不思議な祈りをもう一度聞いてみたいとは思つた。あの心地よい感覚を再び味わいたいとも。

だから部屋にいる時は、大抵聞こえてくる音に注意し、いるまいと思いつつもつい窓の外の海岸を見てしまう。

しかし、波の音に混じつて、あの音律が聞こえてくることは無かつた。

呼び寄せて、祈りをさせようかとも考えたが、あの無表情で面と向かつて祈りを捧げられても、何となく恥ずかしいし、周りに若い男を招き寄せたと妙な勘織りをされても困るし、それに何よりあの男がどう思うかが気になつてしまつ。

第一、あの男が王女の為に祈りを捧げるだろうか？

あの淡々とした口調。おおよそ感情の見当たらない、端麗な顔。誇り高いのか、それともただ感情が表に出会いのか、もしくは感情が動かないのか、まったくわけのわからない男。神官という生き物は、みなああいうものなのか？

いや、と王女は思つ。

大神官とはよく会つが、彼は徳の高さの感じられる品の良い、普通の老人だ。

もちろん、大神官まで上り詰めた以上、何かしら人とは違うものを持っているのだろうが、王女にすら感じられるあの異端さは、大神官からは感じられない。

あの男だけが、他と違つのだ。

おそらく、神殿でも異端の存在に違ひない。実力があるだけに、

一層。

「王女様。大神官様が明日の式典の打合せにお見えになつておられますか……」

侍女が窓辺で物思いにふける王女に声を掛けた。  
出窓のクッショーンに身を横たえるように坐っていた王女は、顔をあげ侍女に振り返った。

「そうか。すぐ行くと伝えておいてくれ  
そして面倒くさそうに、クッショーンから身を起こす王女みて、  
侍女は微かなため息をついた。

彼女はここ何日間の王女の変わった様子に気づいていた。

心配事があれば、おしゃって下さればよいのに。

忠実な侍女は、部屋を出ながら思つた。

しばらくして王女は、大神官の待つ控えの間に現れた。

明日から守護神、ヴァルメーダを祀る祭りが三日ほど行われる。この国最大の祭りであり、行事でもあった。

祭りは神殿で行われる式典からまず始まる。当然のことながら、王女も参加しなければならない。

その神殿を取り仕切る高齢の大神官は、現れた王女を一目みてやさしく言つた。

「王女様。何やら心配事がありのようですが、お顔の色がすぐれませんが……」

王女は老人の鋭さに、舌を巻く思いで苦笑した。

「相変わらず鋭いことだ。大神官」

「王女様の倍以上生きております故」

大神官はしわくちゃの顔を綻ばせた。

「憂いでおられる顔もまた美しいのですが……いかがなされた? 察するところ、恋の病というところですか?」

後半の笑いを含んだ口調に、王女は少々赤くなつて、でもそれを悟られぬように言つた。

「年寄りの勘織りはいただけぬことだな。大神官」

「いやいや。私は喜ばしく思つていますぞ。特にこれに関しては。今まで国内外の貴族たちを全てソデにしてきた王女様が、ようやく人並みの感情を抱かれたのですからな。……ところで、王女様の心を射止めた幸運な男は誰ですかな？」

にこにこと笑顔のままそんな事を言つ老人に、王女はますます顔を赤くした。

「……言つておくがな、大神官。決してそなたが思つてているような理由で、私は憂いていたわけではないぞ。……ただ、祭りが終わつて少しすると、私の十八の誕生日が来る。それを思うと、少し憂鬱になるだけだ」

大神官は、その言葉に、スーッと笑顔を消した。

「そうすると、いよいよ即位なさつて、女王となられるのですな」

「ああ。国の法律では十八歳にならなければ王位を継げないため、今まで王女の身分であつたのだが……。大神官。だが本音をもらすとな、女王になるのは、少々重荷だ、私には……」

「王女様なら、立派な女王となられることでしょう。お嘆きなさりますな。それに、女王となれば、この国の男は自分の思いのままではありませんか。むろん、今までもそうですが。……そう考えると、結構国王職も楽しいものかもしだせぬぞ」

王女は老人流の慰め方に、思わず笑つた。

「そなたらしい言いようだな。私が男だつたら、國中の女を自由に出来ると大笑いだつたかもしれないが、私は別に男好きというわけでもないから、たとえ國中の男が求婚してきても、少しも嬉しくないぞ。かえつてどの男を選んでいいか、困つてしまつ」

「いやいや。今でも國中の男が、王女様に夢中ですぞ。この爺も、國一番の美女であられる姫様に夢中です」

「おやおや」

王女は老人は、二人でくすくす笑つた。

この老神官のおかげで、王女は少し気が晴れたような気がした。

「話は少々変わりますがな、王女様」

大神官はひとしきり笑い終えると、真顔になつて言った。

「実は王女様の即位をこの目で見たら、大神官の位を他を者に譲つて引退しようかと思うておりますのじや」

「え？」

王女は目を見開き、まじまじと大神官の顔を見た。

「なぜ？ そなたは高齢だが、まだまだ元気ではないか。それともどこか悪いのか？」

「いやいや。悪いわけではありません。しかしいつぱつくり逝つてしまふかも判らないですからのお。ここらが引き時ですわ。……それに、若い王女様が国王となられたら、きっと新しい若々しい国造りを致しましょう。その時に、私のようなおいばれがいたら、若々しくなるのもならなくなりましょうぞ。若い次の世代に引き継ぐいい機会だと思つております」

「…………」

王女は目を伏せ、珍しく氣弱になつてつぶやいた。

「そなたがいなくて、私は誰に頼ればいいというのだ？ 父の時代からの大臣達は皆、息子に家督を譲ると言つ。だが、貴族の息子たちは、私の目から見れば頼りにならない。そなただけが頼りなのに」

「……王女様、私の後を継がせようと考えている神官は、多少変わつておりますが、頼りになると思いますよ」

王女は老人の言葉にハッと顔を上げた。

脳裏に浮かんだのは、あの若い神官。

「それは……もしかしたら、真紅の位を持つ、エディアールという名の男か？」

「ええ。……王女様、あの者を存じで？」

大神官は意外といつよに目を見開いた。

「あ……いや……この間、海で祈りを捧げていた神官がいてな。それがエディアールと名乗ったのだ。金髪の、綺麗な青色の瞳をしていた」

「おお。それに相違ありません。お話にはなりましたか、王女様」「ふ、一言二言な。祈りの最中だつた」

王女はやや狼狽氣味に答へながらも、あの真紅の帯を身につけた若い神官を思い浮かべていた。

抑揚のない、だけどひどく魅力的だった声。感情のない表情に、冷やかな空色の瞳。

そして 祈り。

やさしく、切なく、染みとおつてくるようだつた、あの言葉たち。あんなにも懐かしくて、そして静かな一時を、王女は久しぶりに味わつたような気がした。

彼が大神官になれば、祈りを聞く機会が多くなるに違いない……。王女はふとそう考えて、内心苦笑した。

「変わつた男でしてな。眞面目で優秀なのですが、如何せん、人と打ち解けよつとはしない。言葉も少ないし、愛想はないし、感情をまったく表に出さないはで、我が神殿の問題児なのですよ」

そう言いつつも、この老人は、その問題児をいたく気に入つているらしい。口調には、いとおしさと暖かさがあつた。

「そうだらうな」

くすり。思わず笑つた王女に大神官は、ほつゝ、と興味の目を向け、次いで意地の悪い笑みを浮かべた。

「一・三言話しただけで、よくわかりますなあ」

「……何が言いたい？ 大神官」

「これはさつさと私は引退すべきかな、と思つたのですよ。王女様」「からかうな。そういうのではないつ」

王女は子供のようにふくれた。

どうも、この人のいいのか悪いのかわからない老人の前に出ると、王女もただの少女のようになつてしまつようだ。

だが、不快ではない。

王女は、この老神官が、たいそう好きだった。

「そもそも、そなたは精靈祭の打合せに来たのであるつ？」

王女がふくれつ面のまま言つと、老人はますます破顔した。

「おお、そうでした。ですが、まあ、毎年変わりませぬ。王女様が我が神殿にお出でになり、私が祈りと供物を神に捧げて、祭りが始まる。それだけですな。『存じだとは思いましたが、取り合えずはと確認しにまいった次第でござります』

「わかつてゐる。ずっとやつてゐるんだから。目を瞑つてでもやれるぞ」

「頼もしいお言葉ですねあ」

「……ところで、大神官？」

「はい？」

先程のお返しとばかりに、王女は、にっこり笑みを作り、首を傾げて言つた。

「そなた、神殿で問題児であるあの若い神官と足して一で割ると一度よい、とか言われていなか……？」

「…………」

大神官の苦笑がその答えだった。

祭りが始まった。

銀でできたヴァルメーダ神の像の前に、国王代理である王女と大神官が並び、その後ろを大臣やその子息、要職についている者が、扇形に並んでいた。

そして、その扇を、神殿に仕える神官たちがぐるりと取り囲んでいる。

王女と神殿の前には、この年取れた供物がずらりと捧げられていた。

隣の大神官が朗らかな通る声で、高らかに主神ヴァルメーダを讃える歌を唱えているのを、王女は目を伏せたままで聞いた。

祈りとは、人によつてこんなにも変わるものなのだろうか。

……いや、魔詩（呪力を持った歌）である以上、その祈り自体か何かしらの魔力を持つている。

当然、それは歌い手によつて、左右され、当人の力量にもよつて、歌が違うものなつていくものだとは、理屈としては、王女にだって判る。

けれど、古えの、古代語が生きていた時代ならともかく、祈りを魔詩として扱える人間か、はたしていようか。

本来は神語であったはずの魔詩は、今はただの神に捧げる祈りでしかない。

なのに……。

老神官の祈りは、ただの言葉の羅列にしか聞こえないのに、どうして、あの時のある若い神官の祈りは、生きているように感じられたのだろう。

王女は、横田でちらりと回りを見回し、像の近く、王女の周りを囲む神官たちの中に、あの若者の姿を見つけた。

彼は相変わらずの無表情さで、神の像を見つめていた。

王女は改めて気づいた。

他の者にくらべ、どこか超然的な雰囲気を持つ、彼。神殿の中の神官たちが彼を遠巻きにしている理由が、何となく判る。

普通の人より敏感な神官たちは、あの若者が何か違うということに、気づいているのだろう。無愛想だからとか、無口だからとかいうのが理由ではない。

祈りが、彼のだけ特別に聞こえるのは、つまりは、それが彼の祈りだからだ。

彼の口から出ている歌だからだ。

言い換えれば、彼でないと駄目だということだ。

何とやつかいな だが、次期大神官ならば、これ以後聞く機会もあるだろう。

王女は知らず知らず微笑み、それに気づいて赤くなつた。私は変だ。

あの日、あの神官に出会い、彼の祈りを聞いた時から 何かが自分の中で変化してしまつた。

祈りが終わつた。

それと同時に、外でパンパンと、花火の打ち上げられた音が、神殿に響きわたつた。

この合図と同時に、國中で祭りが始まるのだ。

神に供物を捧げ、歌い踊り、飲んだり食べたりして、そして語り合つ。

若い者は恋人と愛を語り、結婚を誓い合つたり 精靈祭の間に将来を誓い合つた恋人たちは、ヴァルメーダの加護を受け、幸せになるという言い伝えがあるのだ。

この日だは、老人も子供も一緒になつて、大いに楽しみ合つのだつた。

「始まりましたな」

神殿から退出しながら、大神官は王女につぶやいた。

王女は軽いため息をつきながら、

「そうだな」

と答える。

この日ばかりは、王女であることが恨めしい。

国中の者たちが祭りに繰り出すのに 貵族でさえもだ 王女  
は祭りを城から眺めるだけで、参加したことがないのだった。  
祝わないわけではないのだが、下々と交わるのはよくないという  
風習が、王家の、特に女性にあったのだ。

おかげで、王女は生まれてこのかた、祭りに出たことがない。

侍女や兵士が祭りに繰り出すのを、毎年、城から見送るだけだつ  
た。

朝からそわそわしている侍女をうらやましく、でも少しもそんな  
ことはおくびに出さず、王女は多くの護衛と共に町中を城へと向か  
つて動いた。

國中、祭りに浮かれて熱氣があつた。

通りに店は立ち並び、人々で賑わっている。

街のいたる所に、木の、あるいは青銅や銀のヴァルメーダ神の像  
が飾られ、広場では等身大の神像の周りに人々が集まって、飲み、  
踊り、そして笑いあつていた。

人々は王女の姿を見つけると、話をやめ、恭しく頭を下げた。

王女にかなう美の持ち主が、はたして存在しようか。

白い肌に神秘的な黒い瞳。

つややかな黒髪が、王女の来ている明るい紫のドレスの肩にふわ  
りとかかり、輝くばかりの美貌を縁取つている。

気品にあふれ、手に触れることがすら恐れ多い高貴さを身に纏い、  
優雅な足取りで王女は人々の間を進んだ。

途中、民の幾人かが勇気をふるい、手一杯の花束を王女に差し出  
すと、彼女は快くそれを受け取り、微笑み、祝福のキスさえ送った。

王女は美しかつたが、冷たい美しさではなかつた。

気性をそのまま表したように熱く、その瞳は賢そうな光を放ち、全身が生氣に溢れた、輝くばかりの美貌だつた。

真紅の帯を纏つた若い神官が、ぞつとするような冷たささえ覚える美貌だつたのに対し、王女のそれは正反対の美しさだつた。

王女は城に帰ると、出窓のクッショönに身を横たえた。

瞼の裏に、あの若い神官の姿が浮かび、次いで祈りも聞こえてくるようだつた。

今日聞いた、大神官とは全く違つた祈り。

懐かしくて、やさしくて、心が騒ぐ。

あの静かな、しみとあるような祈りが、あの怜俐な神官の口から生まれたなどとは、とても信じられない。

けれど、彼の祈りではないと駄目だということも確かで ああ、そんな事はいいのだ。祈りに顔や人格は関係ない。

問題なのは 。

不意に王女は、祈りが聞きたくなつた。大神官のではない。あの美貌の神官の祈りが。

……いつそ、呼び出そうか……。

王女が真剣にそう思つた時、背後から遠慮がちな声が、彼女を呼んだ。

振り返ると、王女の侍女達が頬を染め、バツの悪そうな顔をして立つていた。

「あ、あの……王女様。じ、実はですね……」

どぎれどぎれに言いにくそうにつぶやく侍女達の顔を見て、王女は微笑んだ。理由はすぐ判つた。

「行つてくるがよい。私は大丈夫だから。……祭りに行きたいのだろ？」「ええ。そんなんですっ。王女様」

侍女たちは驚いて、顔を見合せ、そして喜んだ。

「ええ。そんなんですっ。王女様」

「ありがとう」「わこまわ

頬を染めて、喜び合つ。

自分と同じ年や、やや年上の侍女たちを、王女はうらやましげに見つめた。

「……王女様はお出かけになりませんの？」

侍女の一人が、不思議そうに、王女に尋ねてくる。

彼女は一番年下で、王女付きの召使になつたばかりだったので、王女が今まで一度も祭りに出たことがないのを知らなかつたのだった。

「いや、私は……」

王女が苦笑まじりに言つと、侍女たちは氣まずそうに顔を見合わせた。

口には出さないが、王女が祭りに行きたいと思つてゐるのを、彼女たちは知つていたのだ。

一番年上の侍女が、突然息こんで言つた。

「そうだわ。王女様も私たちと一緒に祭りに行きましょうー。」

「え？」

王女と、その他の侍女たちは、ぎょっとして発言者を見た。

「王女様だから祭りに行つちゃいけないなんて、絶対変です。そんな決まりありませんもの。王女様だからこそ、きちんと参加しなければいけないんです。私はそう思います」

「い、いや、しかし……」

「暗くなつてくれば、大丈夫です。あるのは火だけですもの」

別の一人が言う。

「そうですわ。フードを深く被つていけば、誰も王女様だとは気づきませんわ」

「それに、街の娘たちが着るよつたな服をつけて

「言葉遣いに気を付けて」

侍女たちは皆で、頷きあつて、王女に言った。

「誰も判りはしませんわ。祭りに行きましょう、王女様」

周りを囲まれ、日々にそう言わると、さすがの王女も心が揺れた。

王女としての、次期国王としての意識と直覚と自制心が、この祭りの夜には発動しなかったようだ。

行きたいという誘惑に駆られ、侍女たちの言葉に励まされ、王女は、祭りに行くことにしてしまったのだった。

第一章 夜の宝石の王女 4（前書き）

日が沈んで、周りが暗くなると、いよいよ祭りもたけなわになってきた。

人々は白熱し、火を囲んで踊り、そして飲み合い、語り合つ。長年の友や、昨日まで全く知らなかつた人と。

若者や老人、子供に至つてまでみな祭りに繰り出し、家に残つている者は殆どいないという感じである。子供は食べ物を食べる為、老人は飲みあつため、そして若者は恋は語り合つために、みな出てくるのだ。

出会い、契りを交わした恋人たち、この祭りにはそんな恋を求めて大勢人が来る。

王女に仕える侍女たちが祭りに出たがるのくは、このためであるらしい。

城から王女の周りを囲み、守つていた彼女たちだが、街の中央広場までたどり着いた時には、半分になつっていた。

皆、途中で若い男性に誘われたのだ。

王女も何人かの男に誘われかけたものの、周りを侍女たちががつちり護つてゐるため、ついていくことはしなかつた。

だが、侍女たちが誘われると快く送りだした。

一人一人といなくなるたび、心細くなりはしたが、皆が言うように王女だと見破る者はいなかつたので、次第に気が大きくなつていた。

「そなたも行つてくるがいい」

王女を気づかつてか、寄つてくる男の誘いを断つてゐる一番年上の侍女に、王女はやさしく言つた。

いつの間にか、彼女一人になつていた。

「この期を逃すと、いつまでも結婚できないかもしけないぞ？」  
からかうように、王女は言つ。

「で、でも……」

「私のことなら心配いらない。誰の誘いも受けないから。祭りをいろいろと見て回って、一人で城へ帰ることにする」

そめれでも渋る侍女を、誘いに来た男の方へ追いやると、王女は広場を離れた。

「やれやれ、やつと一人だ」

言い寄ってきた男を追いやって、王女は呟いた。  
始めての祭り。始めての経験。何もかもが新鮮に思えた。  
王女は改めてフードを深く被ると、人込みをかき分け進んだ。  
長く同じ場にいると、正体がバレてしまう。  
ここにくるまで、すでに何人かの人間が首を傾げ、怪訝そうに王女を見ていたのだ。

王女には目的があつた。

あの若い神官に会いに行こう。

侍女たちと城を抜け出す計画を立てた時に、密かにそう思つていたのだった。

おそらく、彼は祭りには出でいないだろう。

それに、今なら宿舎には殆ど人は居まい。

いる人といえば、神殿に仕えている人への面会人だけのようだ。  
このヴァルメーダ神殿の戒律は甘く、神に仕える身でも結婚できるし、女性との交渉ももちろん許されている。

神殿の宿舎には一種類あり、一つは独身者用。もう一つは家族ぐるみで住めるようになっていた。

もちろん、宿舎に住まず、自分の家を持ち、そこから通つてくるものもある。

王女はかなり迷つたが、独身者用の宿舎へ向かつた。  
結婚しているとは思えなかつた。

あんな風に、大抵の女性より優れた容貌を持つ、変わった男と一緒になるつという女が、いるとは到底思えない。

しかし、家族が居て、家から通つてきている、といつ可能性もなわけではなかつた。

けれど、あのよつに高い位でいるからには、神殿に住まつてゐる方の可能性がより高い。

宿舎へ來ると、王女は周りの面会人が全て女性であることに気がついた。

みな薄綿を纏い、着飾つてゐる。

王女はああ、と思い当たり苦笑した。

舞姫 つまり、遊女だ。

懇意の神官を訪ねて來てゐるのだろう。

こんな日でないと、おおっぴらには来られない所だ。

あの神官の元にも誰か來てゐるだらうか。

ふと王女は思った。

顔はよかつたから、さわかしモテることだらう。

だが 遊女、というか、女と彼とは結びつかない。

彼からは女の匂いがしない。

あれこれと考えてゐると、次々と女たちは門番に声を掛け、中に入つていき、残つてゐるのは王女だけとなつてゐた。

門番が、躊躇してゐる王女を、胡散臭そうに見つけていた。

王女は意を決すると、声を掛けた。

「申し訳ありませんが、エディアール様はいらっしゃいますか？」

門番はぎょっとして王女をまじまじと見た。

正体がバレたのだろうかと、ドキンとした王女だったが、しかしどうやらそつではないらしい。

「え、エディアール様……だつて？」

と、門番が喘ぐように言つたからだつた。

門番は王女を遊女だと思っている。つまり、遊女がエティアールを訪ねて来たことに驚いているのだ。

驚きながらも、彼は王女を上から下までじっと眺める。

だが残念なことに、王女の顔はフードの中に隠れていて見えない。「あー、エティアール様は、奥院の小礼拝堂にいらっしゃると思います、はい」

「そう。ありがとう」

王女は門番への挨拶もそこそこに、奥の院へと続く小道を歩きだした。

「エティアール様ねえ。もの好きな遊女もいたもんだ……」見送る門番が、そうつぶやいたのを、王女は知らない。

ヴァルメーダは大抵、青年の姿をとつてているとされる。  
青みをおびた銀色の髪。海よりも深い群青色の瞳。手には白い可憐な花、ポワを持つ。

城にあるタペストリーには、ポワの花の化身であるアレリーを豊るヴァルメーダの話が綴られている。

国でも最も有名な祈り「アレリーの歌」をもとに、そのタペストリーは作られているのだ。

そのアレリーの歌が、奥院の一室に入つた王女の耳に聞こえてきた。

聞き間違いはしない。あの神官の声だ。祈りだ。

カーテンに仕切られたその部屋に、王女はそつと入つていった。

神官は一人だった。

石で掘られた等身大のヴァルメーダ神の像の前に立ち、数多くの蠟燭の火に囲まれ、祈つている。

頭を覆つっていたフードとマントを取り、王女は粗末な背もたれに座つた。

人が入つてきたことに気づいていないわけでもあるまいに、若い神官は人などいかのように振る舞つてゐる。

それが心地よくて、王女は黙つた聞きほれた。

王女はいつしかアレリーになつてゐた。

精霊祭の夜、出会つた銀髪の青年に恋をするアレリー。

精霊の友で、ポワの花のような少女。

無理やり嫁がされそうになつた彼女を、銀髪の青年、つまりヴァルメーダが助けるのだ。

そして、結ばれる二人。

蜂蜜色の髪の、美しい少女が、王女の脳裏に鮮やかに浮かび、そ

して消えていった。

祈りが終わったのだ。

神官はしばらく目を閉じてその場に立ち尽くしていたが、やがてゆっくりと王女の方へ向き直った。

あいかわらずの、無表情な顔で。

何度見ても、彼の顔からは何の感情も窺えない。

冷やかな印象を与えるその青い目に見つめられて、王女は少々バツの悪い思いをした。

若い神官は、優雅に会釈する。初めて会った時と同じように。

「……あー。その……、悪いと思つたが、聞かせもらつた。承諾も得ないで……すまない」

「いえ。構いません」

「……そなた、祭りにはいかないのか?」

「興味ありませんから」

眉一つ動かさずに答える。

取りつくしまがないとはこのことを言つのだ。

もつとも、王女だけでなく、誰にでもこのいつ態度をとるようだが……。

門番が、彼を訪ねて女が来たことで、あんなに驚いた気持ちが、なんだか判るような気がする王女だった。

ため息一つついてから、さてと、と王女は立ち上がった。もうだいぶ時が過ぎた。戻らなければならない。

「……また、聞きにきて、よいか?」

フードをかぶりながら、尋ねる。

若い神官は頷いて、答えた。

「どうぞ」随意に。毎晩、この時間に礼拝してますから

奥の神殿を出ると、再び宿舎の前を通りかかった。

門番はまださつきの男だ。

王女のことを覚えているのだろう。興味深そうに、好奇の目で王

女を見送っている。

不快感を覚えながら足早に通り過ぎようとすると、不意に声がかかつた。

「お前、名を何といひ？」

門番ではない。

振り返ってみると、銀色の帯を腰につけた二十代後半の男が、門番の傍に立っていた。

その隣には、派手な恰好をした遊女が王女を胡散臭げに見ながら、男に寄り添っている。

銀色の位は、上位から数えて三番目。

神殿内の各部の長といった役職についている者らしい。

「私……ですか？」

なるべく街の娘らしく、聞き返す。

こんな所で騒ぎになるのは御免だ。

「そうだ。お前、あのエティアールとよぶじくやつてきた娘だらう？ そんなもの好き、滅多にいしないんでね」

言いながら、男は王女に近づいてくる。

王女は警戒し、二・三歩退きながら、

「私とあの方は、そういう関係ではありません。それに……私は遊女じやありません。街に住む、商家の娘です」

「ほう。街娘が、あいつに何の用があつただい？」  
にやにやと笑いながら男は王女の前に立った。

酒の匂いが鼻につく。

ムカムカしながら王女はぞんざいに答えた。

「あなたに言う必要はありません」

その軽蔑したような言い方に、男はカアーッと頭に血が上ったようだ。

「このひ……」

王女のフードに手を伸ばす。

けれど予想していた王女は、サッとそれをかすと、男の手が届か

ない場所へと飛びのいた。

「……ふんっ。まあ、いい。大方、あいつのあの顔に惚れたりて口だろ。だがな……」

と言つて、男は意地の悪い笑みを浮かべる。

「あいつには、幼なじみの恋人がいるんだぜ」

「……まあ」

感心したように、王女はつぶやいた。

内心びっくりしていたのだが、それはおぐびにも出さない。

「でも、生憎と、私はそういう仲でもありませんの。残念ですわね」この男の態度や言葉から、あの若い神官への敵意が感じられた。自分より若いくせに、自分より高い地位にいるのだし、アレはああいう性格だから、それも当然といえば、当然かもしけない。気持ちとしては判らないではないが、でもそれをこちらにぶつけられるのは困る。

「それでは失礼」

王女はそう言つと、男を無視してさつさと歩きはじめた。

男は引き止めようとしたが、それよりも早く王女はその場から去つていってしまった。

城へ向かう王女の心中には、もうあの男の事はなかつた。

「よもや……あの神官に、恋人がいるとは……世の中わからないものだな」

何だか信じられない思いがした。

「今日も沢山の王女様への贈り物が届きましたわ」

ソファにもたれ、お茶のお代わりを待つ王女に、侍女の一人が言った。

その後ろには、何人もの侍女が手に贈り物を抱えて並んでいる。「東の国の素晴らしい織物。金の腕輪。宝石の指輪。真珠の首飾り。どれも素敵なものですね、王女様」

「隣の国の貴族たちが今日も、王女様お目通りを願つて大勢来ていますわ」

と侍女は、一生懸命王女の気持ちを引こうとするのだが、当の王女は少しも興味を示さない。

毎日毎日これでは、見るのすら嫌になる、と王女はそっぽを向いた。

「部屋が狭くなる。さつさと宝物殿へ持つていってくれば、でも……」

侍女たちはお互いに顔を見合せ、ため息をついた。

王女の心を射止めた者が、この國の王となる。

しかも王女は国一番の美女。男が寄ってくるのも無理はない。だが王女は、宝石にも、どんなに素晴らしい男にも興味を示さないし、見向きもしないのだ。

これでは國の将来が心配だ。

侍女たちは、すごすごと贈り物を持って、部屋を出ていった。

「王女様。たまには、その……こうすることにも興味をお持ちになつたらいかがです？ 王女様にならざる、あの素晴らしい贈り物が似合いましたでしょ？」

古参の侍女が、王女のカップにお茶を注ぎながら、説教口調で言う。

王女は少々慄然な面持ちでカップを受け取ると、

「そんなに着飾りたければ、そなたがすればよい。何か気に入つたものがあつたら、好きに持つていいぞ？……そうだ。私に会いにやつてくる男の中にもけつこうまともなのがいるから、コナをかけておいたらどうだ？ 彼らも望みのないものより、身近なものを選ぶと思うがな」

などと、一国の王女らしからぬ事を言つた。

「まあ、王女様……」

古参の侍女は絶句した。

その周りにいる若い侍女たちも、バツの悪そうに苦笑している。

「気にするな。冗談だ」

「もう……」

絶句から立ち直り、ため息まじりにそう言つた侍女だったが、ふと、表情を変えて、

「それはそうと、王女様。大神官様が、来月の戴冠式を最後に、大神官の位を譲つて隠居するというのは、本当ですか？」

「……ああ。あの老人がいないと、淋しくなる」

王女はそつと目を伏せた。

「でも、王女様。次の大神官になる方は、若くてとても美しい方ですわよ」

「ええ。私も見ました。この間、大神官様の後ろにいた方が、その方でしよう？」

若い侍女たちの口々の台詞に、王女はドキンとした。

ついこの間、大神官はある若い神官を連れて、この王宮にやつてきたのだ。

大神官は意味ありげに王女と彼を交互に見つめていたが、王女が彼の元へ毎晩のように通つていることは、おくびにも出さなかつた。そしてそれは、若い神官の方も同じだ。

「大神官様がお止めになつてしまつのは、心細いことですからね、私、あの方が大神官になるのは、とてもよいことだと思いますわ」「この城に来ることが、多くなりますものね」

皆、あの神官に魅せられてしまつたようだ。

うつとりと夢見るような表情になる。

もちろん、あの神官が、女性に愛想よくするわけではない。

城の女性陣が熱い視線の送つても、彼は表情も変えず無視するだけ。だがそれが、かえつて乙女心を刺激するらしい。

「私、あの方に正面から見つめられたら、きっと氣絶してしまうわ

「あら、私なんて、声をかけてもらつたら、もう死んでもいいわ」

「あなたなんかに、声かけにわけないでしよう」

「いずれにせよ、王女様がうらやましい。だって、あの方と話は出来るし。それに、あの方のそばについてつりあうくらいの美しさを持っているのは、王女様だけ……」

「あの方ほど、美しい男性はありませんわ。礼儀正しくて、信頼できそうで。そうは思いません？」王女様

「そうだな……」

王女は苦笑しながら答えた。

幼なじみの恋人のことは、黙つていたほうがよさそうだ。自殺でもされたらかなわないし、その恋人のところへ押しかけていかれでもしたら、相手が気の毒だ。

それに……それに、本当に恋人がいるのかもよくわからない。

あの時会つた銀の位の神官は、王女憎さにでたらめを言ったのもしれないのだ。

本当は、直接本人に聞けばいいのだが、祈りを聞くとすぐ帰ってしまうので、そういう個人的な話をする機会がない。

それに自分が毎晩あの神官の所へ行くのは、祈りを聞くのが目的であつて、彼自身ではない。

少しは興味があるが、聞いてどうするわけでもないし……。

そんな事を騒ぐ侍女たちを尻目に考えていると、一人の侍女が顔を輝かせながら、部屋に入つてきて言った。

「王女様。大神官様とそのお連れが王女様にお目通りを願つておりますが」

とたん、王女以外の侍女達が浮足立つ。

「きっとあのエディアール様も一緒に」

「王女様に顔見せに大神官様がお連れしたに違いないわっ」

ざわめく侍女たちを尻目に、王女はゆっくりと立ち上ると、部屋をでる。

侍女達も主人について、ぞろぞろと部屋を出た。

応接間につくと、大神官と若い神官が、王女に深く礼をする。王女の後ろでは、王女付きの侍女たちらしくおとなしく黙つているが、誰もが若い次期大神官を見つめていた。

「王女様にはご機嫌麗しく……」

大神官が、この状況に今にも吹き出しそうになりながら、王女の傍にきて言った。

「あまり麗しくもないな」

苦笑しながら言つと、王女は侍女達に下がるよう合図した。

王女の命令で、しかたなしに侍女たちは部屋から出ていく。最後の一人が居なくなると、おもむろに大神官が笑いだした。

「すごい騒ぎですね」

「ああ。おかげで騒がしくていかん。今度からは私の方が神殿の方へ出向いた方がいいみたいだな」

「それでは、今度はこちらの方が騒がしくなつてしまつでしょう。国一番の美女をお迎えするのですからなあ」

「どっちにしろ、うるさいわけか」

「さようですね」

「ま、しばらくすれば、みな慣れて静かになろう」

王女は肩をすくめると、中央の豪華な椅子に坐った。

若い神官の視線をくすぐつたく思いながら、けれどなるべく意識しないように、大神官の顔を見る。

何の用だ?

言葉には出さずに視線にこめた。

老神官はその視線をやんわりかわすように微笑むと、

「王女様の美しいお顔を拝見させていただきにまいりましたのじや。この爺がボケてしまつても、王女様のそのお顔を忘れないでいるため……」

「それだけ口が達者なら、しばらく耄碌する」とはあるまい。……で、本当のところは?」

大神官が会いにきてくれたのはうれしい。本当の祖父のような気がして、心が休まる。

即位の準備で城中は騒然としているし、その中心である王女の周りは興奮と緊張だらけだ。

それなのに各国の使者や、いまいましい求婚者への謁見と、心の休まる暇なんてない。

だからこそ、毎晩のように若い神官の所へと通つてしまつのが、それを外しても、この老人と語らうのは、なによりも楽しい。

王女の気持ちをわかつてくれるから、ついにちらりも素直に話してしまうのだ。

ぐちも聞いてくれる。悩みに答えてくれる。

友達もいない、心を割つて話せる者もいない王女には、全く有り難い人物なのだ。

ただ、王女のことをわかりすぎて、多少いらぬことをするきらいがある。

この意味のない訪問がそうだ。

即位の儀の打合せではない。まだ早すぎる。おまけに、人ではなくて

-

これがやつかいなのだ。

どうやら、この人のいい大神官は、王女と金髪の若い神官を逢わせるためにここに来ているらしいのだ。

王女が若い神官と顔見知りであることを、大神官は知つている。精靈祭の前、それについて大変な誤解をしたことも……。

別にそれはかまわない。

だが、毎晩のように会いに行つてゐる王女には、ひどくバツが悪

いのだ。

かといつて、そのことを言つのは、死んでも嫌だ。

王女は内心ため息をついた。

「なにやら浮かぬ顔ですな」

誰のせいだ、誰の。

とトボけたことを言つ老人に、王女は言つてやりたかったが、深く理由を問われても困るので、あわてて誤魔化すことにした。

「そうか？ そうなわけではないのだが……」

「いえいえ。この爺にはわかります。とは言つても浮かれろという方が無理ですな。一国の王になるのは大変なことですし。かといつても、誰も代わることはできないのですからなあ」

どうやら大神官は、王女の元気の無さを即位のためと勘違いしたらしい。

「これも運命だ」

当の王女はあっさりと言つた。

「王女様ならさぞ立派な女王になられましょ。私は年を取りすぎております故、何の役にもたちませぬが、ま、その分、このエディアール殿が女王様のご期待に添つようになりますでしょ」

と、初めて真紅の神官の名が出て、王女はどきんとした。

さつきからどうも居心地の悪さを感じてしまうのは、その当人がじつと王女を見つめているからなのだ。

もちろん、含みのある視線ではなかつたけれど。

王女はしかたなしに若い神官を見た。

そして少し固い声で、

「期待している」

とだけ言つた。

若い神官は表情を動かさないまま、頭を伏せる。

「はい」

その様子も返事も、少しも楽しそうではない。

むしろ、何となく面倒臭そうに感じられた。

大神官の地位につけることを、名誉あることだとは考へていないと  
ことは確かのようだ。

なりたくなつたのではなくて、指名されて それはおそらく、  
隣にいる大神官だらうと思われる しかたなしにやる、といった  
様子だ。

冷やかな表情。動かない感情。

手の内を相手に全く見せないあたり、政治家むきのようにも思え  
るが、如何せん、野心や欲がなさすぎる。俗的ではない。  
だが、大神官の位には、むしろうつてつけのようにも思えた。  
宗教と権力が結びつくところくなことにはならない。

この国の大神官の役割とは、格別に政治的なものではなく、あくまで王の相談役、補佐役なのだ。

そういう意味からいえば、他の誰よりもこの若い神官は信頼できそうである。

「そういえば、そなた、両親はいるのか？ ビーの出身だ？」

ふと気づいて、王女は尋ねた。

夜会話することはほとんどなかつたので、突然聞いてみたくなつたのだ。

そして、大神官がいるのはやや気になるが、なしくずしに幼なじみの恋人の事も聞いてみよう、と思つた。

「出身は東部のレイナンデーです。両親は、母は数年前に亡くなりまして、今は父か一人です」

レイナンデーはこの国で一番日の大きな街だ。同じと同じ海岸沿いにあり、漁業のさかんな豊かな街である。

確かにこの総督には、王女のはとこがついているはずであつた。

「その父親は、そなたがない今、一人で暮らしているのか？」

「はい。魚の仕入れ業をしております。……私は、その職業に適していないのですから……」

それはそうだろう。王女は内心思つた。

漁師でも仕入れ業でも、何でも、神官以外は似合ひそうにない。

「なぜ、神官になつたのだ？」

「人とは違つた力を持つておりましたので、そこしか行くべき道がなかつたからです」

あつさりと彼は言った。

若い神官の隣で、老神官が苦笑している。  
思わず王女の口に笑みが浮かんだ。

「そうか……」

つぶやいて、くすくす笑う。おかしくてたまらなかつた。  
「すまない。あまりにらしい答えなんで……」

言いながらも、おかしくて笑つてしまひ。  
その間でさえ、彼の表情は変わらない。

この男が、乱れるといふことは、おそらく一生あるまいよ。王女  
は確信した。

こういう男が王として生まれていたら、わざかしおもしろかつた  
うつひ。

そうでなかつたことを、残念に思うべきか、国にとつてよかつた  
と思つべきか。

これから近い将来、起つるであろう事件を、夢にも思わず王女は  
朗らかに笑いながら、そんな事を思つたのだった。

侍女が部屋をさがると、王女はさっそく行動を起こした。ベッドから出ると、出来るだけ動きやすい質素な服に着替え、廊下に誰もいないのを確かめると、なるべく音を立てないようにして歩き始めた。

途中、見回りの兵に遭いそうになり、慌てて彫像の後ろに隠れる。見回りの兵が何も気づかず行ってしまうと、王女は普段あまり人が使わない小さな階段を降りた。

この階段の壁という壁には歴代の王や王妃の肖像画が飾られている。

人があまりここを使わないのは、これに原因があるのだ。

しかも、ここをずっと下れば王の墓所にもある。この城の地下には壁かけの肖像画の人物達が眠っているのだ。

気味悪くて通るものはまずいない。

だが王女は怖いとは思わない。いつか自分の絵も亡骸もそこに入るのであれば、怖いはずがあろうか。

それに墓所には王族だけが知っている抜け道もある。

王女は墓所の、中央にある建国の英雄王アルフエールのひときわ大きい石棺の前に来ると、トントントンと三回ほど足を踏みならした。

墓所中にその音が響く。

やがてアルフエール王の石棺の組み合わせた石の一か所が、ゴトリと音をたてて引いていく。

そして、やがてそこには獅子のレリーフが現れた。その獅子の口の中の大きな把手を思いつきり引っ張ると、レリーフの下の石がガタンと動き、それは人一人が通れるくらいの通路になつた。

王女はランプを片手に中に入り込んだ。

城は切り立つた崖の上に建てられていて、東側は海に面しているが、その反対側の西には丘の裾野から森が広がっている。抜け道は、その森の小さな洞窟に続いていた。

森は城下街の西側をぐるりと囲む形で広がっていて、その森の終わりである街の郊外に、ヴァルメーダ神殿があつた。

つまり、このまま森を迂回していけば、神殿につけるのだ。

夜になると森に入る人などほとんどいない。

王女は安心して神殿へ向かった。

王女が毎晩若い男の元へ通つていると侍従長が知つたら、どうするだろうか？

王女は薄暗い林道を歩きながらくすくす笑つた。

きっと、有無を言わさず結婚への運びとなるだろう。たとえやましいことを、何一つしていなくても。

そんなことを考えているうちに、王女はいつのまにか神殿の敷地内に入つていた。

祭りの日のように正面から入つていくと、門番や警備の人にお会いしてしまうが、森から入つていく道にはほとんど人通りはない。

誰にも見つからないで王女は、奥の小神殿にたどり着いた。

通い始めのうちは、王女が付く時にはすでに祈りは始まっていたのだが、最近は、王女が来るのを待つてから始めるようになつたようだ。

たいした進歩だ。

どうつてことない事なのだが、それでも、この男がそれだけ気をきかしてくれることが、多少なりとも嬉しい。

垂れ幕を上げて部屋に入ると、すでに若い神官はヴァルメーダ神像の前に立つていて、王女の姿を見ると深く礼をした。

そして祈りを始める。

王女は頭から被っていたフード付きのマントを外すと、粗末な椅子に腰かけた。

今日の祈りは、今までに聞いたことのないものだった。

だが、王女の耳をやさしく打つ。

自然と、肩の力が抜けてくるのを感じた。即位についての「ゴタゴタや、忙しさ、煩わしさ、そして、なによりも不安が消えていく。この無愛想で、感情のないような男の口から、よくこんなにやさしく暖かい祈りが出るものだと思う。

……いや、だからこそなのかも知れない。

自分のためでも、王女のためでも、まして國のために祈っているのでもない。

そして、神のためでもない。

王女には、彼が、何か見えない漠然としたものへ祈っているようを感じる。

だからこそ、こんなにも、安らかで、優しい。

たぶん、自分でも何のため祈るのか判らないのかも知れない。

聞きながら、若い神官の横顔をそっと見た。

女性なら、敬遠してしまうほど整った顔。

男だって、並んで歩きたいとは思わないだろう。

俗物的な興味だが、こうなると幼なじみの恋人という人物をますます知りたくなる。

感動したことすらなさそうな、あらゆる感情に欠けている、けれど美貌の男を恋人にしようなどと、よほどの度量のある人物か、そのことに気づかない鈍感な者に違いない。

いずれにせよ、大物だ。

ぜひとも知りたい。

昼間は大神官がいたから聞けなかつたが、今日こそは聞いてみよう。

そう思つてゐると、不意に声が止んだ。

祈りが終わつたのだろうか？

いや、そうではない。  
外で話し声が聞こえた。

男と、女の声だ。

の方には覚えがないが、男のボソボソとした声には聞き覚えがあつた。

あの銀色の位の神官だ。

やばいかな？

思わずマントに手をのばした時、垂れ幕がぱさりと勢いよく開いた。

入ってきたのは、薔薇色の頬をした、王女と同じ年くらいの若い女だった。

あの男はいない。

男が連れ込んだ遊女だろ？かと思ったが、服は質素なもので至ってシンプルだ。

その手の女性ではないらしい。

女は神官を見、次いで王女を見て、ハッと息を飲んだ。入った瞬間は明るかつた顔が、わざと青ざめ、頬はぴくぴくと引きつっている。

田の大きな、かわいらしい女性だった。

「……エディ」

王女を意識しながら、女は若い神官に呼びかけた。

「サリア。どうしてここへ？」

びっくりした様子もあまりなく、冷静な声と顔で彼は入ってきた女性に詰つた。

どうやら神官の知り合いらしい。

王女は悟つた。

この娘が、あの男の言つていた神官の幼なじみなのだ。

娘は驕ぐよつて言つた。

「あたし……どうしても、エディに会いたくて、父さんに頼んで来させてもひつた。都は伯父さんの家があるから……一月後の王女様の戴冠式まで滞在させてもらおうと思つてきたのよ？ エディつてば五年前ここに入つたきり、一度も帰つてきてくれないし、手紙

もくれないんですもの……あたしが逢いにくるしかなじやない？  
こんな夜に訪ねるのは悪いと思つたのだけど、入口で会つた、え  
えっと、パリスさんつていう神官の方が、あなたは夜いつもこいで  
籠もつているつて言うから……」

ちらりと、娘 サリア は、王女を見た。  
その目の奥には疑惑と嫉妬がちらついていた。  
まづい時に来てしまつたな……。

バツの悪い思いをしながら、サリアににこりと笑いかける。  
国一番の美女に微笑みかけられたら、たとえ女性といえどもいつ  
とりとしてしまうであろう。

案の定、サリアはポツと頬を赤く染めた。

「え、えっと、あの……」ちらの人は？」

神官が口を開く前に、王女が素早く口を挟んだ。

「アルヴァーナ。ただの聴衆よ。……貴女は？」

「あ……サリア。このエティアールの幼なじみ、です、けど……」「  
よろしくね、サリアさん。あ、言つておきますけど、私はただ次  
期大神官の祈りを伝授させてもらおうと思つて聞きにきてるだけ  
ですから」

なるべく丁寧で、やわらかな口調でいった。

妙に勘織られても困るし、かといつてもよつた少々傲慢な  
言葉遣いをしたら、心証を悪くしてしまふかも知れなかつたからだ。

「次期……大神官？」

サリアは首を傾げて、神官を見た。

どうやら、大神官の就くことを、知らせていなかつたらしい。

「エティ……大神官になるの？」

「ああ」

「まあ……」

サリアは絶句してしまつたようだつた。

そして嬉しいような、誇らしいような、悲しいような、怒つたよ  
うな、複雑な顔になり、

「そんな大事な事、どうして知られてくれなかつたの……？」  
「知らせる必要もなかつたから。それに、なつてから知らせても、何も不都合ないでしょう？」

冷たい、とさえ言える言葉だった。

とてもじやないが、愛しい女性に言つ事ではない。

決まりの悪い思いをしながら王女は、席を立つ機会を失つて、二人の会話に耳を傾けた。

「そんな……そんなことなら……、就任の時には、村一同で都にくるわよ？ おじさまだつて、どんなに喜ばれるか……」

「現在の大神官殿の役職を継ぎ、祭時には女王様と共に先頭に立つだけですよ」

「だつて……だつて……大神官といつたら、女王様のご相談役じゃないのつ。それだけでも……すごいことだわつ。女王様を助けて……国を治めるのでしようつ？」

田に涙を浮かべ、サリアはムキになつて言つた。  
自分が言つた事への反応がないので、半ばヤケになつているようだ。

けれども、女王様女王様と連呼するところに、彼女自身のこだわりがその辺にあるのでは、などと王女はつい勘織つてしまふ。  
無理はない。

本人にあまり直覺はないが、王女はこの国で一番の美貌の持ち主だという噂である。

その王女といつも顔をつきあわす役だといえれば、こだわつてしまふのはしかたのないことだ。

話題が自分の方へ移つてきたので、王女はますますきまり悪げになつてしまつた。

「国を治めるのは女王様と大臣方で、私はただの相談役にすぎない。

……それに

と、若い神官は王女をちらりと見て、そこで初めて微かに笑つた。

「王女様は、私如きの助けなど必要となさらないでしょう。強い方

ですか？」

「え？」

サリアは驚いて王女を見た。

「……まさか……王女……様？」

サリアが目を見開いてまじまじと見つめたものだから、王女は苦笑しながら、そして内心はこいつめと神官を恨みながら、うなづいた。

とたん、サリアの顔が真っ赤になつた。

「あ、あたしつたら、王女様に対しても失礼な事……」

「気にするな」

立ち上がりながら、にこりとやわしく微笑みかける。

「普通の姫は、今頃は城の寝台の中だからな。ま、私は少々破天荒なところがあるから、こつしてお忍びもしてしまうが、……」

「少々ですか？」

変わらず無表情のまま言つた神官に、王女はにらみつける真似をして、

「そなたは口が悪いな。女が逃げるぞ？」

「かまいません。結婚する気はありませんから」

ヒクッ。サリアの表情が固くなつた。

王女は彼女に悪いことをしたと思ったが、それは王女の介入する問題ではない。

二人で解決するべきことだ。

マントを肩に放ると、神官が言つた。

「お帰りですか？」

「ああ。久しぶりに会つたのなら、つもる話もあるつ？ 今日のところはこれで退散することにする。馬に蹴られたくないからな」「別に」

と、彼の返事は消極的否定なのだが、表情にも声にも何ら感情が見当たらない。

王女は心底、サリアが氣の毒になつてしまつた。

「あ、あの……王女様？」

「うん？」

「毎夜、ここに来て祈りを聞いていくのですか？」

「え？ あ、ああ。まあ」

何うら恥じることはないのだが、つい後ろめたい気分になってしまふ。

「くらこの國の主でも、男女が一人きりで夜を過ごしてくるとあつては、いい気持ちがするはずがない。」

「あの…… それでしたら、明日から、私もこ一緒にさせてよろしいですか？ 村に帰るまででいいんですけど……」

縋るように王女を見上げる。

意識的にか無意識にかはわからないが、サリアは釘をさしたいらしい。

心の中で苦笑しながら、王女は答えた。

「ああ。もちろん、かまわない」

「一週間後の即位日は、晴れると占って出ましたぞ。姫様」

並んで庭を歩きながら、不意に大神官は言った。

「そうか。まあ、雨や嵐にならなければよいな」「

気ののらない返事をすると、王女は肩を竦めた。

今日はあの神官はいない。そのせいだろうか。何だか気が抜けてしまっている。

「ところで……」「

「ホン、と咳一つすると、大神官は話題を変えた。

どうやら、これが言いたかったことで、晴れ云々の世間話は、話の取つかかりであつたらしい。

「侍女頭の話ですと、毎夜どこかへお出かけになつてこりつしゃるそうで……」

ぎくりとして、王女は足を止めた。

バレてた？

てっきり誰にも知られてないと思っていたのに……。

「そ、それ、侍従長も知つてゐるのか？」

やや狼狽氣味に尋ねる。

「いいえ。まだ私だけにしか言つていないそうです。けれども、侍女の間ではけつこう噂になつてゐるそうですよ。……まあ、皆王女様を信じております故、面と向かつて王女様に尋ねる者はいませんが。……御身を大切にしてくだされ。王女様は一人の体ではございません」

真剣な顔をして、大神官は言った。

「……つまり、自重しろと？」

「いやいや。そつぱん申しておつません。……けれど、もし万一のことがあつたら……」

「別にやましことはしておらん」

「それは判つております。けれど、世の中には不遜な輩もあるのですし……」

「…………」

王女が目を伏せ、返事をしないのを知ると、大神官は一つため息をついて話題を変えた。

「それにしても、思ったより王女様がお元気そうなので、安心しましたわ」

「そうか？」

だとしたら、あの神官の祈りのおかげだな。  
と、声に出さずにつぶやく。

「ええ。それに何やら、前よりも輝いておられる。……その秘密は、夜毎の外出にあるのですかな？」

にこにこと、邪気のない笑いをして、大神官は王女を見た。

「……結局、それが聞きたいのだな？」

王女は軽いため息をついた。

もちろん、言えるわけがない。

「王女様。王女様は、いつもどちらからお帰りになられるのですか？」

小神殿を出ながら、フードを深く被る王女にサリアは尋ねた。

「裏門から森へ抜けて、城へ帰ることにしてる」

「まあ、森へ入るなんて、怖くはありません?」

「別に……。比較的街に近い道を行くし、危険なことは何もない」

「そうですか」

「それよりそなたは? 神殿は街外れにあるから、街の伯父さんの家とやらからは、大変ではないのか? 街内とはいえ、夜は人ひともないし……」

「あ、それでしたら大丈夫なんです。パリスさんって神官の方が、大変だらうつて毎晩送つていって下さるんです」

「パリス……？」

「はい。銀色の位にいる、なかなか素敵で親切な人なんですよ」

「銀色……」

王女の脳裏に、初めて神官を訪ねた夜に会つた、銀色の帯をつけた男の姿が浮かんだ。

ひどく酔つていて、遊女をはべらせていた、あの男。やけにエティアールを敵視していた。

あれが……素敵？

信じられなくて、王女は目をパチパチさせてしまった。

「サリア。あの男と前に会つたこと、ある？」

「ええ。三年ほど前、エティを訪ねてきた時、少しだけだけお話をしました。彼も優秀な神官なのですってね」

「そう……」

「あの……王女様。王女様は、好きな男性はいらっしゃないのですか……？」

どうやらこれが聞きたいらしくて、王女に声をかけたらしい。恥ずかしそうに聞いてくる。

暗にあの神官との仲を探りたいのだろうか。

王女は勘繰つた。

「いや、別に。今は女王職のことで頭が一杯で、そんなことにまで頭がまわらん。大臣や侍従たちは早く結婚させたいらしいがな。……そなたは、あの神官が好きなのだろう？」

お返しとばかりに唐突に聞くと、サリアはみるみるうちに顔を真っ赤に染めた。

「やつぱり……分かります？」

「ああ。そなたを見れば、な」

ただ、気の毒なほど、相手にされていないようだが、……。

まあ、あの男相手ではしかたないか。

そんな事を王女が考へているとは露知らず、サリアは顔を赤くしてまま嬉しそうにいった。

「小さい頃から好きだったです」

「昔から、彼はああいう性格だったのか？」

「はい……いいえ、そうですね、前はもっと笑ってたし、明るかっ  
たし、やさしかったんです。……人当たりもよくて……。きっと、  
神官になるの、つらかつたんでしょうね。今は、あまり人に打ち解  
けてないみたいですね。……あの人、不器用で感情を表すの苦手なん  
です」

「…………は？」

王女は、目を丸くしてしまった。

「あの人、無愛想でしょ？ 無口だし……。でも、不器用なだけな  
んです。本当はとてもやさしくて、……シャイなんですね」

頬を染めて言つサリア。

しかしその口調には、王女への優越感が入り交じっていた。  
誰よりも、彼の事をよく知つているのは、理解しているのは、自  
分だと。

そう曰が語つていた。

「シャイ…………そ、そ、う…………か？」

呆然としながら、王女はサリアをまじまじと見た。

「私には…………あれこそ、何の感情も持ち合わせていないように見え  
るのだが…………」

「そんなことはありません。誤解です、王女様。エティは感情を表  
すのが苦手なだけで……だから皆に誤解されやすいけど……我だけ  
には、あの人のこと、ちゃんと判つていました」

「…………」

王女は目を輝かせるサリアに、何と言つていののか判らずに、頬  
を手を当てて、困惑したような笑みを浮かべた。  
何といふことだろ？…………。

正面に行く道と裏門に行く道との分かれ道に来ると、王女はその  
場に誰か人が立っているのを見て、フードを深く被つた。

あの銀色の帯をしめた男だった。

サリアは表情を輝かせて、王女に会釈すると彼の元に行つた。サリアに手を振つた王女は、フードの影の奥で男と視線がぶつかったのを感じた。

それは、とてもではないが、友好的な視線ではなかつた。

眉をひそめながらも、裏門への道を進む。

あの銀色の位の男のことを考えていたのは始めのうちだけで、やがて、王女の心はサリアの言つたことでいつぱいになつた。

やり切れない想いがした。

森を早足で抜けるが、まっすぐ城へ帰る気がしない。

そこで、城へ行く道を外れて、海岸へと回つていった。

初めてあの若い神官と出会つた、海辺へ。

昼間よりも何倍もの速さで吹きつける潮風が、王女のマントを痛いくらいになぶつていく。

夜の海は、自分の髪や瞳よりも真つ黒で、闇がそのまま蠢いているように見えた。星はない。空には、灰色の雲が、風と同じように速い速度で流れしていく。

ヒコーキコーと、狂つたような風の音と、打ち寄せる波の音で、他には何も耳に入つてこなかつた。入る余地はなかつた。  
けれど、体の奥でくすつという笑いの振動が起こり、それは風の音が吹き抜けの耳の奥にも轟いた。

くすくすくす。

王女は笑つた。おかしかつた。  
涙が出るほど。

何ということだらう。

あの少女は、大きな誤解をしている。大きな間違いを犯している。王女はその生まれからか、表に出ない人の感情というものを読み取るのに長けていた。

どんなに隠しても、無表情にしても、何となく判つてしまつのだ。言い換えれば、そのくらいのことを感じ取れなければ国王にはならない。

富廷といつのは、誰もがその心を押し隠し、表情だけはにこやかにしているようなところなのだ。

だから、政治的手腕といつのは、いかにその相手の腹を見極められるかにかかっている。

王女は馬鹿ではないし、自分のカンと田に信頼をおいていた。だがそのカンをもつてしても、あの若い神官の感情を読み取ることは出来なかつた。

不器用でも、無口でも何でもない。

彼には、表に出すべき人並みの感情がないのだ。

表情が鉄仮面なら、中身も然り。

彼がやさしく人に接するのは、それが彼の対人のスタイルだからだ。やさしさではない。

そもそもやさしさは感情ではない。

怒りや悲しみ、喜び、憎しみ、そういうものが感情なのであって、いくら微笑もうともやさしく接しようとも、それは感情から出たものではないのだ。

明確な、愛情でさえない。

無口？ シヤイだつて？

とんでもない誤解だ。

王女はくすくす笑つた。田には涙さえ浮かべて。

あの男は、人の半分も感情を持ち合わせていないのに。感情を、動かすこともないのに。

かわいそうなサリア。

哀れなエディアール。

王女は海に向かつて笑い続ける。

何がおかしいのか。

何が哀しく思えるのか。

それすら分からずには

即位の日も一日後に迫ると、さすがに忙しく、王女は夜のお忍びの機会を失つていった。

だが、そのかわりとばかりに、式の打ち合わせに大神官と若い次期大神官が頻繁に訪れては、侍女たちを喜ばせる。

しかし頻繁に訪れるのは、彼らだけではなかつた。

それは王女にとって一番頭が痛いことであつた。

その求婚者たちの中でも特に熱心なのは、大臣の一人であるサヴァー二伯爵の子息のヘルウェールという青年だ。

用もないのに城に来ては王女に面会を求める、城の廊下で王女とすれ違つたび過多な贅美を王女に送り、王女とそのお付の侍女たちを閉口させる。

「何なのでしょう、あの方は」

「本当。王女様を見る日つきったら、いやらしく」

彼と会つたび、すれ違つたび、侍女達は同じ言葉を台詞を繰り返す。

ヘルウェール・サヴァー二はあるの神官には劣るもの、なかなかに悪くない顔立ちをしていた。

しかし浮名が絶えず、一部の女性にはすこぶる評判はよくない。「あの方、王女様を射止めるために身辺の整理をしているって噂よ」

「まったく、何人の女性が整理されていることでしょう!」

王女は、その侍女達の軽口を尻目に、一人ホッとした息をついた。

ヘルウェールと会つたび閉口してしまう王女だったが、彼の事は頭にはなく、思うのはあの神官のことだつた。

王女は気づいていた。

いや、気づかされてしまった。

自分にとつて、あの神官はどうやら特別なのだということに。

ただ、恋とか愛とか、そういうものなのかなはわからない。

初めは、彼のあの祈りに興味を持った。

けれど、それを聞いていいるうち、あの感情を持たない、人を愛すことさえ知らない男を、王女は心に受け入れてしまっていた。

サリアがいるのに。

ほう。再びため息。

もう一日も神殿には行っていない。あの神官とは毎日城で会っているが、それはあくまで式の打合せであって、王女ののぞんでいるものではない。

サリアはどうしているだろうか。

やはり、王女のいない夜も、通っているのか。

そう思いはするものの、別にそれが嫌だという気はしない。嫉妬も感じられない。

王女がサリアに感じるのは……自分を取り巻く侍女たちにとは違つた形の好意と、そして微かな哀れみ。

サリアが故郷から出てきたのは、あの若い神官に会うためだ。昼間は彼の方が忙しく、会つて話す機会もない。

サリアが彼と会えるのは、実際、あの夜の間だけだつたはずだ。しかしそこにはいつも王女がいて……。

二人きりになつて、あの二人は、どんな話をするのだろう……？

サリアが悲しい思いをしていなければ、よいのだが……。

サリアにすっかり同情している王女は、あの若い神官の方の意識を変えることはできないのなら、せめて、サリアはもっと別の幸せを捜して欲しいと思つた。

あの男では駄目だ。悲しい思いをするだけ……。

忙しいのに、そんな事を考へると、いても立つてもいられない気がした。

今日こそは、どんなに忙しくても行つてみよう。王女は心に決めた。

ところが、城は抜け出せたものの、いつもよりかなり遅くなってしまった。

王女が小神殿についたのは、神官が祈りをちょうど終える頃だった。

「いつも、いつもそうだわ。エーティは！」

声が聞こえた。サリアの声だ。

何かあつたのだろうかと、廊下を急ぐ王女は、しかし、礼拝堂の入口近くに、中の様子を窺つている人影を見つけて足を止めた。

あのパリスとかいう、神官だ。

彼は、王女の姿を認めて、顔を歪ませた。

中で何か起きているらしい。

「何も言わずに、神殿に入つてしまつて、帰つてもくれない……！ どうして？ 何がいけなかつたの？ あたしの気持ち、知つているくせに！」

「何も君のせいじゃない、サリア」

サリアの口調とは対照的な、エーティアールの声。

こんな時なのに、憎たらしいほど落ちついた、感情のない口調。

「あそこは、私の居るべき場所でない。だから出た。……君の気持ちには、答えられないよ。私は駄目なんだ。どうしても……」

「……ば、馬鹿っ！」

王女は垂れ幕の外で、足を止めて聞いていた。

何だか胸が痛かった。

同じように、辛そうにその会話を聞いているパリス。

王女には、彼がなぜ、エーティアールを憎く思つているのか、あの日、王女につつかつてきたのかがわかつた。

……彼は、サリアが好きなのだ。

だから、毎晩のように、彼女の送り迎えをしていたのだ。 サリアの心が、誰に向いているのか、わかつていながら……。

サリアが飛びだして來た。

王女を見てハツと一瞬足を止めるが、目をそらし、再び駆けだした。

垂れ幕の中から、エディアールが出てくる気配はない。  
そして、パリスも追いかけようとするのをためらっているようだ  
った。

「サリアっ」

王女はたまらず、サリアを追いかけた。彼女を一人にしたくなかったのだ。

小神殿を出て、一瞬、正面門の方へ行つたのか、それとも裏門の方へいったのか迷つたが、しかし王女はさつき自分が来た方角つまり、森の方へと向かつて走つた。

しばらく行くと、サリアはすぐ見つかった。

門のそばに倒れて立ち上がりもせず、肩を震わせている。

王女の気配を感じて、顔を上げたサリアの頬は濡れていた。

「王女様……あたし、転んでしましたわ。スカートの裾に足をひっかけて……」

無理に笑おうとする。

思わず手を差し延べた王女だったが、サリアをそれを押し止めて、自分で上半身を起こした。

「……とんでもない所をお見せしちゃいました。ごめんなさい……」「いや……。怪我はないか？ 歩けるか？」

「ええ、大丈夫です」

涙をぐいっと袖に拭つて、笑う。

けれど、笑うはしから、目に涙が浮かんで頬に流れた。

「……あたし……振られちゃった。……王女様くらい美人だったら、振られなかつたかもしないのにね……。ううん、エディ、エディ相手だつたら、誰でも駄目ね。あたし……でも、好きだつたなあ……」「サリア……」

王女は、服が汚れるのもかまわず、サリアの横にぺたんと座り込んだ。

「王女様、服汚れてしまうわ……」「いいんだ。洗えば落ちる」

サリアはフフツと笑つた。

「王女様つて、やさしい……。あたし、ずっと王女様に嫉妬してたのに……。エディと毎晩二人きりで会つてたし、すつごい美人だから彼と並んでもお似合いだつたし……、それにエディ、あの人気が、王子様のこと、けっこう氣にしてたし……。これって凄いことなんですよ、王女様。あの人、今までこれほど他人を心に入れたことな

いんだから……」

サリアは、そつと泣くと、立てた膝の中に顔を埋めてしまった。  
やがて、ぐぐもつた涙声で言つ。

「……あたし、本当は、エティを連れて帰りたいと思つて来たんです。昔から、あたしのわがまま、聞いてくれたから、今度も絶対聞いてくれるつて思つて……。でも、帰らないつて言われてしまつた。あそこは自分の場所じゃないつて。あたし、何だかあたしたちの過去すべてが否定された気になつちゃつた。エティ、変わつてたし、目の前にいるのは昔のエティじゃないつて、あたし言いました。そしたら、『私は私だ。何も変わつてない』つて……。それで判つたんです。エティ、あそこでは無理してたんじやないかつて……。でも、でも、そうしたら、あたしの思いはどうじつたらいいの？ どこへ行けばいいの？ ……ねえ？」

「サリア……」

王女は何と言つたらいいのか、判らずに途方にくれた。  
慰めの言葉などない。何を言つても慰めにはならないだらう。  
やがて、サリアは、

「王女様、お願い。あたしを一人にしてください。あたし……このままだと、王女様に酷いこと言つてしまいそう……」

聞かないわけ、いかなかつた。

サリアがそうしたいと言うのならば。

王女は立ち上ると、ためらい、氣にしつつ、今度はエティアルの方はどうなつているだらうと、礼拝堂への道を戻つた。

正面入口に、男がいた。

パリスだつた。

今日はしらふのはずだ。

けれど、その日は怒りと悲しみにじみつて、全身からせき立つと憎しみの氣を迸させていた。

王女は嫌な予感がして、立ち止まつた。

「お前の、せいだ。お前たちの……ヒテイアールのつ！」

激しい憤りの言葉をぶつけられ、そして、そこに自分への殺意を感じ取り、王女は知らず知らず身を引いていた。

「お前さえ、現れなければ……。サリアは幸せになっていたかもしない」

「……一体、何を？」

王女はこの男が、何か酷い誤解をして居ることに気づいた。

彼は、サリアが振られたのは、エディアールに王女　しかも彼は王女の正体を知らない　という女が出来たからだと思っているのだ。

それにしても……と王女は不思議に思う。

パリスはサリアがあの神官とつまくこつて欲しいと思つていたのだろうか。

サリアが好きなはずなのに？

「……幸せについて……そなた……サリアが好きなのではないか？」

それでそなたはいいのか？」

とたん、彼は顔を苦々しく歪めた。

「ああ、好きだつたさ！　数年前、初めて会つた時からなつ。だが……彼女があいつを好きで、それで彼女が幸せなら、俺はいいと思つていた。何も伝えず、見守つていこうと思つてた……！　それなのに、あいつはお前のせいで、サリアを捨てたんだ。お前のせいでの……」

「……」

「そ、それは……」

違う。そう言おつした王女の言葉は、突然襲つてきたパリスに、声にならずに消えた。

背中と腰に痛みを感じた、と思つた瞬間に、王女は地面に倒れこんでいた。

男が押し倒したからだった。

いつのまにか、パリスの手にはたいして長くはない剣が握られていて、それが王女の首にぴたりと当てられていた。

「それは、違う」

王女は言った。恐怖は感じられなかつた。

ただ、サリアの、そしてパリスの心を思つて、哀しくなつた。

そして 次には憤りも。

「お前は、愚かだ。一番、愚かだ。私だとて、人のことを言えただぎりではないが……お前が一番馬鹿で意氣地なしだ」

「……何だとつ！」

ぐつ。襟元をつかむパリスの手が王女の胸を締め上げる。喉にちくりと、次に、焼けつくような痛みが走つた。

剣が首に少し食い込んだのだ。

それでも王女はその黒い瞳をひたとパリスに向けて、苦しい息の下で言つた。

「伝える勇氣すら持たぬお前が、一番愚かだと言つたのだ」

「……このつ」

パリスが更に力を入れようとした時、冷ややかな声がした。

「その人を離しなさい」

声のした方を向こうとしたパリスは、突然、体に何かの力がかかつて、弾き飛ばされた。

「う、わあああ！」

王女は、何が起こつたのか、判らない。

ただ、不意に締め上げるパリスの手が離れて、押さえつけられた体が自由になつたことだけが、事実としてあつた。

何度も深呼吸をして息を整えると、上半身を起こし、痛みを覚えていた首に手を当てた。

手にべつとりと何かがついた。

血だ。

けれど、それほど深い傷ではない。

ほつと息をついて顔を上げた王女の目には、数メートル先に飛ばされて啞然としているパリスと。

王女の数メートル前でかばうように背を向けて立っているエディアールの姿が映った。

「一体、何が……？」

王女はどうしてこうなったのかさっぱり分からなかつた。けれど、訳がわからないのは、彼女だけではない。何も触れられていないのに、突然吹っ飛ばされたパリスも、信じられない思いでエディアールを見ていた。

彼が何かやつたのは明白だつた。

そんなパリスの様子を冷ややかに見下ろして真紅の神官は更に言葉を紡ぐ。

「この方に無礼な真似は許しません。下がりなさい」

その言いように、呆然としてエディアールを見上げていたパリスはハッと我に返りきつい視線を投げかけた。

彼が王女を庇うの気にくわなかつた。……サリアを悲しませたくせに。

「貴様……何もかも、貴様が……！」

飛ばされる途中、放り投げた剣を手に取ろうとする。

だが、その剣はパリスの手がつかまえられる前に空中にひとりでに浮き上がつた。　その剣先は、ぴたりとパリスに向いている。驚愕に目を見開いたパリスは、自分の体が金縛りにあつたように動かせないのに気づいた。

「…………」

その様子を眉動かさないで見届けたエディアールは、ゆっくりと王女に振り返つた。

「彼はもう指一本たりとも、あなたに触ることはできません。大丈夫ですか……？」

近づいて、座り込んで成り行きを見ている王女に手を差し延べる。

「あ、ああ……」

王女は彼の手に捕まつて立ち上がつた。

信じられないという目で、助けにきた若い神官を見つめる。

「あ、あれは……そなたが？」

不意に前に彼が言つていたことを思い出す。

たしか、彼は、何か力があるとか言つていなかつたか？

「はい。そうです」

安心させるためか、エティアールの顔にかすかな笑みが浮かんだ。

「そうか……助かつた。有り難う」

「いえ、もともとは私のせいです」

言うなり、彼は振り返つてパリスを見た。

そして静かな 感情のこもらない声で言つた。

「あなたが私を憎く思つているのは、判ります。ましてや、サリアの事については、私は何も言える立場ではない。しかし……なぜ、それをこの方にぶつけるのです？ 私に直接いえばよろしいのではないですか？」 パリス・アルベール

パリスは剣先を向けられたまま、エティアールを憎々しげに見つめた。

「何も彼も、貴様のせいだ。貴様が、その女につづきをぬかして、サリアを……」

「サリアと私はそんな関係ではありませんよ」

「そんなことはどうでもいい。問題は、貴様がサリアの心をズタズタに引き裂いたことだ。貴様など、貴様など……」

ぎりり、歯をくいしばり、パリスはうめくよつて言つた。

「なぜ、貴様なんだ……！ どうして！ お前のような奴、サリアを幸せに出来るはずがないのに、どうして！ なぜだ！」

「それが愚かだというんだ」

王女は首をおさえつつ、口を挟んだ。

「お前が何をした？ その思いを、直接サリアに言つたのか？ 違うだろ？ お前は、そうして自分から何もぶつかりもせず、不満を他人にぶちまけるだけ。そんなお前に、サリアが振り向くはずなかろう。彼女は勇気ある人だ。言いたいこと、したいこと、自分の

心のままにぶつかつていった。けれど、お前はただの臆病者だ。彼女の幸せを見守るだと？ エディアールが幸せに出来ないだと？ 自分の心ひとつさらけ出すことも、言葉にも出来ない奴に、そんなこと言う資格などない！」

「あはあはあ。肩で息をする。声を出すたびに切られた首がひりひりと痛んだ。

けれど、王女は言わずにはいられなかつた。

みなそろつて、大馬鹿者だ！

サリアも。エディアールも、パリスも。そして、私も……！

パリスは呆然と、王女の言葉を聞いていた。

王女と、そして自分に対する殺気がなくなつたのを見てると、エディアールは、彼の戒めを解いたようだ。力を失つた剣がまず地面に落ち、次いでパリスががくりと膝をついた。

だがそんな様子を一顧だにしないで、さらに追い打ちをかけるように、王女は言った。威厳を持つて、王女らしく。

「恨み言を言う暇があるなら、さつさと行くがよい」

パリスはその言葉につられたように顔を上げた。

「いつまでそうしている。さつさと行け」「は……？」

「鈍い奴だな、本当にお前は！」

イライラと、不機嫌そのものの声で、王女は応じる。

「さつさとサリアを追いかけると言つてるんだ。彼女は森に向かつたんだぞ、真っ暗な森に！ 明かりを持たずな。さつさと追いかける。見失うぞ」

それは自分の気持ちを言え、というのと同じ事。

忌ま忌ましげに、ずれかけたフードを振り払うと、王女は更に言う。

「彼女は、今すぐにも村へ帰るつもりだぞ。……だから、予定の戴

冠式までは返すな。お前が責任を持つて引き止めろ。よいな？」

それを見て、王女はよしと微笑んだ。

「この私を傷つけたんだからな、ただではすまんぞ？ それ相応の結果をあげてこい。それで罪は許してやる」

ぎくりとして、外に行きかけたパリスは振り返った。  
そして王女の顔をまじまじと見つめ。

「もしや……王女……様？」

「早く行けと言つてる。グズグズしていると、サリア共々地下牢行きにしてやるぞ」

「……は、はいっ」

背筋を伸ばして返事をすると、パリスは慌ててかけだしていった。

「あの男、私のことを他に漏らすかな？」

「大丈夫でしょう。地下牢へ行きたいとは思わないはずですから……」

駆けていく背中を見送りながら、そんな会話をかわす。

「サリアは、いい返事をするだろうか……？ いや、きっと大丈夫だろう。この間、あの男のことを素敵だと褒めていたし……私には理解しがたい感覚だがな。そなたを好きになるくらい物好きな娘だから、きっとあの神官によりよい返事するだろう」

「……真つ暗なはずの森を、一人で歩いていく勇敢な方もいますしね。……妙な事に巻き込んで申し訳ありません」

そう言つてエディアールは深々と頭を下げた。

「まったくだ。あやうく首をかつきられるところだったぞ」「怪我は大丈夫ですか？ 見せて下さい」

「大丈夫だ。もう血は止まつてゐる。しかし、この傷の言い訳をどうすればいいのかな。本当の事言つたら、情状酌量なしに、あの男死刑だぞ。首のあいた服もしばらく着れないな……」

途方にくれていると、突然エディアールの手が首に伸びてきた。

その手がそつと傷に触れる。

「……？」

突然の彼の行動に目をバチバチさせた王女だったが、首の痛みが急になくなつたことには、もつとびっくりした。

やがて、彼が手を離した頃には傷はすっかりなくなつて、また元の白い肌に戻つていた。

傷がついていたなんて、まったく信じられないくらいだ。

「驚いた……こんな事も出来るのか……」

首に手をあてながら、王女は感嘆した。

「めつたに使いませんが……」

「大神官が、お前をぜひと推薦したのも頷けるな」

「……大神官殿も、誰も、私の力のことは知りませんよ。もつとも、あの方は気づいておられるようですが」

「……そうなのか？ でもなぜ自分から言わないんだ？」

「あまり人に見せるべきものでもないでしょ？ 他の人が持つていないものを、おおっぴらにすれば、いらぬ面倒が起きるだけです

……」

淡々とした口調からは何の感情も見られなかつたが、その面倒が降りかかったことがあるのだといふことは、その言葉から想像できた。

「大変なのだな……便利だけれど」

「そうですね」

「けれど、今日は助かつた。お前のおかげで、明後日の戴冠式が国葬にならずにすんだぞ」

「いえ……。ところで、お帰りですか？ それとも祈りを聞いていかれますか？」

「え？ もう終わつたのではないのか？」

「いえ、サリアと話をしていましたから」

「……どうか……」

王女は微笑んだ。



第三章 海辺の国のかず 1(前書き)

こよこよ最終章です。

全能神ヴァルメーダは言った  
『アルフェールよ精靈の主よ

ここは神の國

神に選ばれし國

そして汝の國

我が愛と我が心を以て

我はそなたとそなたの子孫

そして我が國にして汝の國を護ろう』

英雄王アルフェールは言う

『我が主よ

偉大なる銀色の神ヴァルメーダよ

私はこの國の王となりて

あなたの代わりに立とう

あなたを祀ろう

そして私の子孫、そのまた子孫は  
永遠にあなたを愛するだろう

我が主ヴァルメーダよ』

全能神ヴァルメーダは告げる

『我が友アルフェールよ

それでは私は友情の証に、この地に再び降り立とう  
汝の血脉が絶えるその時まで

我らの心と力とが大地を癒すだろう  
この国が絶えるときまで』

朗々とした声が響く。

大神官の最後の祈りだ。『ヴァルメーダとアルフェールの誓い』

と呼ばれるこの祈りは、戴冠式でからず神前に捧げられるもので、実質的には大神官の役目はここで終わる。

今日、王女は女王になつた。

パレードに出るため、神殿を出ていく王女は、神殿の前で大勢の人たちの歓声を受けながら、振り返つて、今日で長い間の役目を終えた大神官を見た。

仕事の終わった彼は、王女を実の孫のように可愛がる本来の姿に戻つて、涙を流していた。  
その隣には次の大神官が立つていて、いつもと変わらぬ様子で王女を見守つている。

王女は涙を流す大神官を見、そして自身も泣きそうになりながらも、ぐつとこらえて彼らに手を振つた。

嬉しいような、淋しいような、哀しいような気がした。

それは、大神官も同じだろう。

馬車に乗つて、街の大通りを行く女王となつた王女を見るために、大勢の人人が通りに出て、歓声を上げている。

青空の広がつている空には、パンパンと勢いある花火の音と光が瞬いていた。

「女王様つ

「アルヴァーナ様！」

「女王陛下、万歳、万歳！」

歓声を上げる民衆に答えるように、王女は笑顔で手を振つた。

花火と歓声と紙吹雪の上がる道を、王女を乗せた馬車は、ゆっくりゆっくり進んでいく。

外を眺めて、手をふっていた王女は、ふと民衆の間に知つた顔を見つけた。

サリアとパリスだ。

二人並んで笑顔で王女に手を振つてゐる。王女は微笑んで手を一

杯振つた。

すでに手をあげるのも苦痛なくらいだつたが、それでも嬉しさに振らずにはいられなかつた。

パリスの思いは通じたらしい。

それでこそ、王女も怪我したかいがあるつといふものだ。

幸せに。

聞こえないのを承知で、王女は言つた。  
だが通じたようだ。二人のいる場所から離れていく馬車に、二人  
は確かに頷いたのだから。

人々は美しく聰明な王女を誇りに思つてゐたので、この戴冠には大いにわいた。

街のあちこちでは、王女の絵姿が飾られ、城からふるまわれた酒や菓子に、大人も子供もみな喜んだ。街から遠くはなれた地域でも、大いに賑わい、外国からの客も大勢来て、あちこちで祝いの言葉が聞かれた。

夜の宝石の王女が女王となつた上は、皆の次の関心は王女のお相手　伴侶のこと　に移つた。

「あの美しい女王を射止めるのは誰だらう?」

そんな会話は、街のいたる所で聞かれた。

しかし全く女王が誰を選ぶのか、予想がつかないというのが誰しもの感想でもある。

「サヴァー二伯の女たらしの息子が、狙つてるつて聞いたけど……」

「いやあ、全然相手にされてないつて話だ」

「トルラーン大臣の息子も、女王に惚れてるつて聞いたけど……女王が全然結婚に興味を持つてないつていうじゃないか」

「もつたいねえな。あんなに美人なのに」

「いや、だが結局、世継ぎを生むために結婚せざるを得ないだろ?あの女王の隣に並ぶんだつたら、ちつと見目のいい男じゃなきゃな」

「おまけに頭もよくなきや、釣り合いがとれない」

またある所では、こんな会話がなされた

「でも、女王様には実は好きな人がいらっしゃるっていう噂よ」

「あ、それあたし、城に勤めている友達に聞いた」

「貴族はみんな、自分が自分の子供を女王様のお相手について望んでるんでしょ？ それで女王様の周りは大変なんだって」

「可哀相にね。その好きな人と結ばれればいいけどねえ」

いずれも女王に同情的な意見が多く、彼女に政治的手腕があるのだから、その相手にそれを望むような声はない。ただ、女王が幸せな結婚をしてくれればいいと願う意見が多いようだ。

そんな民衆の善良な意見も何のその、貴族の世界の水面下では女王の相手を巡り、ひそかなしのぎあいすらあつた。

その民衆の善意と、貴族の欲望の標的である女王となつた王女は、数日たつて、忙しさも一段落すると、再び夜のお忍びを始めるよつになつた。

王女の頃と、やることも量も同じなのだが、その身にかつてくる責任は違つようで、王女は多大なストレスを抱え込むことになつた。それ故、噂になりつつあるのも承知で、つい若い神官 今は大神官になつたエディアールの元に訪れてしまう。

彼はしばしば元大神官と一緒に城へやつてくるのだが、侍女の目も大神官の目もあるので、そこで彼に祈りを頼むわけにはいかないのだった。

「女王様、女王様」

いつものお忍びの帰り、王女はサリアに呼び止められた。

彼女は戴冠式が終わっても、帰る気配を見せず、夜の礼拝堂に元気に通つてきている。

でも以前と違うのは、もう一人観客が増えたということだ。もちろん、パリスである。

彼はサリアに告白した日以来、すっかりカドが取れ、エディアールとも円満に付き合つていた。

王女のことも、誰にも言つていよいよだ。

「何？ サリア？」

一段と可愛らしさを増したサリアは、王女に付き合つて裏道を行きながら、小さな声で報告することがあるんです、と言つた。

「あたし……明日、村に帰ります」

王女はびっくりした。

「か、帰るつて……そなた、パリスのことまだつあるんだ？」

サリアはこり笑つて、

「もちろん、一緒に行つてくれます。ふふ

「あ、ああ……そういうことか」

「はい。それで、たぶん……こっちの方にあたし、越してくることになると思います。あたしだけがですけどね。もちろん、いろいろと準備があるから、もうしばらく後のことですけど」

「そうか、おめでとう。サリア。これからもよろしくな」

「はいっ」

元気に言つてからサリアは、不意に言つて止んでしまって、小さくつぶやく。

「それで、あの……エディの事なんですけど……。あ、そういう妙な意味じゃなくて、今は幼なじみとして女王様にお願いがあつて……

「な、なんだ……？」

胸がドキンとなつた。

「あたし、エディの事、好きだつたんですね。もちろん、今はもう諦めています。あたしには……たぶんあのを理解してあげられないから。でも、女王様には判るんじゃないですか？ あたし、ずっとそんな気がしてたんです。誰にもわからなかつたあの人のこと、女王様なら理解して差し上げられるるんじゃないかなって。だから……だから……女王様に、エディの事、頼んでいいですか？」

「え……えつと……」

王女は答えに窮してしまつた。

「た……頼むつて……、彼には助けなんていらないのではないか？」

「……確かにそうです。あの人、誰にも頼らざり一人でやつていけると思います。ずっとそうでしたし。……でも、人つて一人じや生きていけないんです。あたし、最近になってよくそう思つんですね。だから、あの人的心に受け入れられている女王様なら、きっと判つてあげられる。女王様にしか頼めないんです。お忙しいのはわかっています。けれど、少しでも、エディの事、気に掛けてやってください。お願ひします。女王様」

王女はしばし迷つた末に、うなずいた。

王女にはわかつてしまつたのだ。

サリアはまだあの若い神官のことが好きなのだと云ふことが。

けれど……。

王女にそれを託すといふは、サリアにとつても気持ちのけじめもあるのだ。

「わかつた。彼のことは私が責任とるつ。だが……彼に面倒かける

のは、私の方かもしれない。今だつて、わがまま言つて、祈りを聞かせてもらつてる」

「あら、それはいいんですよ。エディだつて、女王様がお忍びでいらっしゃるの、待つてゐるんですから。……あ、祈りといえば、パリスがエディの祈りには不思議な力を感じるつて言つてましたわ。女王様、気づきました?」

「……え?」

王女は目を瞬かせた。

不思議な力云々のことではなく、それにサリアが全く気づいていなかつたことに、王女は驚いていた。

「あたしには、ただの言葉の羅列にしか感じられなかつたんですけど……。パリスは、祈りの元の魔詩としての力を、エディには引き出せるのではないかつて言つてました」

「……そう……」

王女は田を思案するように田を細めた。  
エディアールには、不思議な力がある。

その彼ならば、ただの祈りの言葉と化した魔詩本来の力を引き出せ具象化することも可能だつ。

それが、そうならないのは　いや、そうなつたら神殿で大騒ぎが起きるだらう。

だから、具象化にはまだ至つていないので　おそらく、彼が魔詩本来の目的で祈りを述べているわけではないからだらう。  
だから、中途半端な力は、ある特殊の耳を持つ者（たとえば神官とかには）その力の片鱗が見える。

サリアにはまったく普通の祈りに聞こえて、神官であるパリスには妙に聞こえたのは、たぶんそういうことだからだらう。

「……では、私は?」

王女には特別な感覚はない。なのに、どうして王女だけが彼の祈りの特殊性をまともに受けてしまうのだらう。王女だけが……。

「女王様？」

サリアが突然おしゃだまつてしまつた王女を、不思議そうに見ている。

「あ、ああ……。心配するな、ちょっと考え事を……な」

「女王様になるのって、大変なのですね。いろいろと難しいことをえなければならないし……。あたしと同じ年なのに凄いなって思います。エディも女王の仕事は大変だらうって言つてましたわ。エディがあれだけ他人を心配するなんて、初めてです……」

「サリア……。あ……、向こうにはパリスとどのくらい行つてているのか？ こちらにはいつごろ？」

なるべくサリアと話している間は、あの神官の事を言いたくない。すばやく王女は話題を変えた。

「三月くらいですか……。しばらくパリスも休暇とつて滞在するつて言つてましたから……。みんなびっくりするでしょうね。ふふふ嬉しそうな顔をするサリアに、王女はやさしく微笑んだ。

「サリア……幸せか？」

「もちろんですっ。女王様。女王様も早く幸せになつてくださいね」「私は今でも充分幸せ」

「やだわ、女王様、女の幸せのことですよお」  
笑うサリアは、充分幸せそうだった。

「女王様。会議の間で大臣方々皆お待ちです」「判つた。すぐ行くと伝えてくれ」

「女王様。隣国の大使がお見えになつております」「応接間に通して、もてなしている。これが終わり次第、すぐ行く」

「女王様。求婚者であられるカナン男爵がいらして、女王様にお目通りを願つておりますが……」「忙しいと伝える。そして追い返せ」

「……大変でござりますなあ女王様」

訪ねてきた元大神官はふおふおと笑つた。

この大変というのは、群がる求婚者の山を差して言つている。その求婚者を追い返した直後の王女は、その老神官の言葉にまつたくだ、とうなずいた。

「うるさいつたらないぞ。断つても断つても、諦めない」「女王が結婚なさるまで続くでしょうな」

「……お前、楽しんでいるな?」

「いえいえ。女王様の苦しみは私の哀しみです」「ふんつ。よく言つわ」

王女の私室で、侍女の入れたお茶を飲みながら軽口を叩いていると、多少なりとも心が和んでくる。

引退したものの、この老神官はよく王女を訪ねてきてくれた。時には、現大神官と一緒に。

「まあ、何とかやつておるわ。そちらはどうだ? 新しい若い大神官はうまくやつていいか?」

元大神官はにっこりと笑つた。

「ええ。そつなくやつていいようですよ。あれなら、若い人材をすえたことに不満を持つていいる石頭たちも文句はつけません。私の眼

力もなかなかのものですな。最近は、新たに真紅の位に昇進したパリスといつ名の若い神官を自分の補佐にして、若手中心でうまく運営しているみたいですね。私の出る幕はありません

「そうか……」

パリスが今度は真紅の位になり、大神官の補佐になつたのか……。王女はにつこりと極上の笑みをもらした。

その笑みを見て、老神官は何かを感じ取つたらしく、にやりと笑つた。

また、いらぬことを思つたようだ。

「な、なんだ……？」

「いえ、また一段とお美しゅうなられたと思いましてね。……うちの新米大神官は、どうですか？　もつ一つの方の役田もきちんと果しておりますでしょうか？」

「あ、ああ。時々様子を見に来る……そなたも時々一緒にいるから知つてているだろ？」「

「ええ、もちろんです。もちろんですよ」

「…………」

何だかまた妙な誤解をしたようだつた。

王女が目を細めて見ているのに気づき、老神官は話題を変えた。

「そういえば、求婚者で思い出しました。ついこの間、サヴァール伯の若殿にお逢いした時、あの御仁は私に、女王の事をお聞きになりましたぞ」

「…………」

「…………」

「女王様が毎晩どこかに出掛けているところのは本当のことなのか、と……。もちろん私はそのような事実はないと言つておきましたが……」

王女は眉をひそめた。またやつかいな相手に噂が届いてしまつたようだ。

「女王様」

真剣な声が、王女を呼んだ。

顔を上げた王女は、老神官の真剣な表情にぶつかった。

その目は王女を心配している表情でもあった。

王女はいたたまれなくなつて、目を逸らした。

「判つてる……。軽率だ、自重しろとこうのだらう？　けれど……

「そこまでは言いませんが……。女王よ。そろそろ答えてください。でもよろしいですか？　一体、どこぞに行かれて居るのです？」

「…………」

「この爺を信じてくだされ。誰にももらしませぬ。それどころか、何か力になりたいと思つております。聰明な女王様が軽率だと自分で思われてまで行つていることです。何か事情がおありなのでしょう？　出来ることは致しましょう」

「…………」

王女は深いため息をついた。

誤魔化すことはできなかつた。

「…………」

「…………は？」

「…………神殿だ。そなたの神殿の、礼拝堂に行つてるんだ。私は…………礼拝堂で、王女が誰のところへ行つているのか判つたらしい。

老神官は目を丸くし、次いで笑いだした。

「な、なるほど……っ。そう、そういう事ですか。そういうことだつたわけですねあ」

突然吹き出した老神官に、王女は面くらつていたが、彼の誤解の根本が何だつたのか思い出し、慌てて言つた。

「い、言つておくが、そういう理由で行つてゐるわけでもないし、何らやましいことをしてゐるわけではないぞつ。ただ、私はつ、私は…………彼の祈りを聞きに行つてゐるだけだつ」

「わ、判つておりまする」

「そなたのその態度の、どこが判つてるといふんだ。誓つて言つが、何も一人きりで居るわけではないぞ。パリスも、サリアも一緒だつたのだから

「はいはい。信じますとも。邪魔も致しません。心行くまでお行き  
ください」

「…………」

少しも判つてないぞ。王女は憮然として思った。  
だが、秘密を打ち明けたことで、多少なりとも心が軽くなつた気が  
がする。

目の前ですくすく笑つている老人の楽しそうな表情に苦笑して、  
王女はお茶に口をつけた。

ただ……。

一つだけ気掛かりといえば、ヘルウェール・サヴァーーのことだ。  
老神官が否定しても、それをあの男が信じただらうか。……いや、  
たぶん、信じていないうだろう。

なにか……しかけて来るかもしれない。

ふとそう思つと、王女の胸は嫌な予感に騒ぐのだった。

その時は意外と早く来た。

その日は、何だか妙な胸騒ぎがして、王女は一瞬行くのを止めるか、と考えた。

だが、最近はエティアールは王女が行くのを待つてくれているようで、サリアの故郷にパリスも行ってしまった以上、何だか行かないわけにはいかない気もした。

そこで、何時ものように、墓地へ行き、秘密の通路を通りて森に出て、火を持ちながら森道を歩いていくと……。

不意に何か人の気配がして、王女は足を止めた。その気配はこっちを窺っているようだった。

「誰だ？」

王女が鋭く誰何する<sup>すいか</sup>と、がさりと草むらを分けて出てきたのは。

「げつ」

王女は思わず呻いてしまった。一番嫌な相手だった。

ヘルウェール・サヴァーーー。

「女王様が毎晩出歩いているのというのは、本当だったのですね。……この時間、いつも森を女性が歩いているという情報が入ったものだから、もしやと思って来てみたら……。女王様、出会えて大変うれしく思いますよ」

王女は警戒して、辺りを見回しながら、

「……私は少しもうれしくないぞ。そこをどいていただけないか？」

私は先へ進みたい

「どこぞへ通つているのかは判りませんが……私としては先に進ませたくないませんな。ちょうどよい機会です。私の、貴方様への愛を知つていただきたい……夜はたっぷりありますから」

火に照らされた男の顔は、獲物を見つけた時の獵犬の表情。

王女は怯えた。

だが、それを相手に知られたくはなかつた。死んでも。

「そこをどきなさい」

王女は命令した。声が震えないように、しつかりした口調で。  
しかし、男は聞かず、王女の側に寄ってきて……、

「ああっ……！」

手からランプが離れた。叩き落されて王女の手から離れたランプ  
は転がつて草むらの中へ。

だがランプ拾うと思う間もなく、王女の身体は地面に倒されてい  
た。

「離せっつ……！」

もがく。しかし、男の腕は思つた以上に頑丈で、王女の細い腕が  
どんなに暴れても、たやすく動きを封じてしまった。

前にパリスに倒された時は、何の恐怖もなかつたのに、今王女の  
心にあるのは目の前の、自分の身体を組み敷いている男に対する憎  
しみと怒りと、恐怖だけだつた。

「無礼者っ。離せと言つてる！」

「大丈夫です。怖がることはありません。……愛しております、女

王様……」

耳元で熱い吐息と共に、囁く。

王女がぞつと身を震わせている間に、男の唇は彼女の首筋にあつ  
た。

悔しさのあまり、涙がじわりと浮かぶ。

こんな男に、こんな所で……！

しかし、そうは思つても、男の力は強く、どんなに王女が力をい  
れてもビクともしなかつた。

自分の無力を、王女は嫌といつほど思い知つた。……男の腕一  
本すら退けることのできない、女故の無力を。

悔しい……！

男の腕が、王女の胸に伸びた。ビリッと音がして、王女の着ていた服が破ける。

王女はハツとした。

男が手を動かしたことで、片方の手が自由になつたのだ。  
夢中で土を掘ると、それを男の目めがけて投げつける。

「うつ……！」

力が緩んだ。男が目を抑えている隙に、さつと身を起すと、王女は道を神殿に向かつて走りだした。

「つ、捕まえろっ！」

目をおさえたまま男が命令を下すと、何処からか隠れていた五・六人の男たちが出てきて、王女を追いかけ始めた。  
しかし、二ヵ月以上もの間この道を通り続けていた王女に、地の利はある。

数分もしないうちに王女は追跡をかわすと、そのまままっすぐ神殿に向かつた。

今はただ、逃げ込むことしか頭になかった。

火は置いてきてしまつたが、月明かりのおかげで道には迷わない。  
もう追つているはずはないのに、でもまだ追つてくるような気がして、王女は足を止めずに森を駆け抜けた。

王女がばたばたと駆け込んだ時、若い大神官は神像の前にいた。  
胸騒ぎがして、いつもより早く礼拝堂に来ていたのだ。

「どうしたので……」

振り返った神官は、その王女の出で立ちを見て、めずらしく驚いたようだった。その顔を見て、王女の方が驚いてしまう。  
しかし、自分の姿をかえりみて、それも仕方ないと想いなおした。  
王女の恰好はすごかつた。

マントはすでに黒い髪は乱れ、所々に土がついている。同じように服にも泥がつき、しかもその服は胸元が破られていた。一

目で何があつたが判つてしまつのような姿だつた。

若い大神官が驚いたのは一瞬で、素早く神像の前の台にかけてあつたシーツに手を伸ばすと、王女の肩にかけた。

手が少し肩に触れた時、王女がびくつと怯えたように反応したので、エディアールは憐憫を覚えた。

それは、彼の中では大きな驚きだつた。

王女は気づかなかつたが、彼の表情も僅かに変化し、痛々しげなものを見かべていた。

が、すぐに元の無表情に戻る。いや、戻したといつべきだひつ。王女は同情されたり哀れに思われるのを嫌うだらうから。

「大丈夫ですか……？」

変わらず淡々と聞いてくるので、王女はほつと息をついた。

彼の落ちついた声を聞くと、高ぶつた気持ちまでもが落ちついてくるようだつた。

自分を落ち着かせるために息を整えると、王女は傍らに立つ神官に言った。、

「……ああ、大丈夫だ。来る途中、少々アクシデントがあつてな……だが、目に土をお見舞いしてやつた」

「そうですか。……すぐに何か着替えと、湯と……熱いお茶をお持ちします」

「たのむ……」

エディアールの姿が垂れ幕の奥に消えると、王女は崩れるように椅子に腰を下ろした。

少しずつ落ちついてきた王女の心を襲つたのは、まず憤りだった。あの男、あの男、ゆるさない……！

こんな屈辱。こんな仕打ち。

男に触れた部分が何だか酷く汚れてしまつた気がした。

氣味わるいくらいに、その感触も覚えている。

触れられた感触を拭い去ろうとドレスの袖で首筋をさすりうとした王女はこの時初めて自分の今の姿に気付いた。

ドレスや髪は泥で汚れ、胸の部分が大きく引き裂かれている。せつからく神官が渡してくれたシーツにも汚れが移っているしまつているようだった。

エディアールが目的のものを持つて戻ってきた時には、王女は髪についた土を忌ま忌ましげに落としながら、部屋をつぶついていた。

「動かない方が、落とせますよ」

その言葉に、王女はおとなしく再び椅子に腰をおろした。

「神殿には男しかいないので、女物はないんです。失礼ながら、私の前の礼服を一時身に着けていていただけませんか?」

「……それでいい。すまない。面倒をかける」

王女は田を伏せた。

神官の持つてきたお湯で、手足について汚れを落とす。首や胸のあたりも念入りにこすった。

そうしなければ、あの感触も落とせないと思った。

その間、礼儀正しい若い神官は王女に背を向けていた。

が、何も音がしなくなり、王女の動く気配がないのを知ると、振り返った。

王女は俯いていた。

怒りよりも、今は悔しさの方が大きかった。  
びくともしなかつた、男の腕。運良く逃れたけれど、もしかしたら今頃は……。

なぜ、自分はこんなに無力なのだろう。

国を護らなければならぬのに、自分は男一人からも身を護れな  
い。

王女はぐっと唇を噛みしめた。

「なぜ、私は女なんだろう。どうして、男に生まれなかつたのか。  
……男の腕一本解けないほど無力なものに生まれてしまつたのか……  
なぜ……！　私は、自分に力のないことが悔しい。何も出来なかつたのが悔しい……」

目にじわりと涙が浮かんでくる。

零すまいと思っているのに、田から溢れていく。

「……こんな私に、国は守れそうもない。女王など……無理だ！」  
拳をぎゅっと握りしめる。爪が手の平に食い込んだが構わなかつた。

普段の王女なら、こんな弱音を人前でさらけ出したくはないだろう。

けれど、今は胸のつかえを、出してしまったかった。  
一人の胸にしまつには、あまりに悔しそうだった。

不意に、握りしめた手が暖かくなつた。

驚いて顔を上げると、若い神官がすぐ王女のそばにいて、手にふれている。冷たいくせに、手は暖かい。

「あなたは強いです。女王。……本当の強さとこゝのは、弱さを知つてのことの強さです。あなたは強い。……あなたがおっしゃるのは、腕の力のことでしょう？　しかし、その力には限界がある。でも心の強さには限りは在りません。……強くなりなさい。女王。すべてを許し、包み込めるような強さを持ちなさい」

「……エディアール」

王女は初めて、彼の前で彼の名を呼んだ。

くやしさと哀しさに溢れた王女の心に、何か暖かいものがふわりと通り過ぎた。

そして、何か熱いものも。

一人は見つめあつた。手を触れ合つたままで。

その接触した部分から、何か熱のようなものが身体を駆け抜ける。いや、その熱は身体の芯から出でてゐるよつとも思えた。

下腹部にズクンと衝撃が走つた。

甘く痺れるような、感覚。

おかしい……。

ふんわりとしたやさしさにその熱さに包まれて、ぼおっと頭の芯がぼやけてきていた王女は、心の隅で思った。

高揚する気分は、どこか自分のものでありながら自分ではないような感じがした。

身体と心の奥の一一番大事な部分を何者かに握られ、その大きな力が王女の全てを引っ張つていているような、方向づけていくような……。

けれど、それは不快ではない。

王女のその心は、まっすぐ田の前にいる若い神官に向かつた。奇妙な緊張感。心が震えた。甘美なまでの震えが、全身を覆つた。

一つに分かれたような意識の中で、王女は彼を見つめた。

彼はいつものような涼しげな表情をしていたけれど、でも、彼も何かを感じているようだ。

冷たいはずの青い目は、小さな炎を帯びていた。それは灯った蠟燭の火の反射でもあつたし、彼の中にある熱いものの現れでもあった。

身体の熱さに支配されかかつた時、不意に彼が何かを感じたように視線を転じた。

二人の前に立っている、ヴァルメーダの像へ。

つられて見た王女の目には、銀色の青年神の身体から、青い仄かな光が出ているのを捕らえた。

……ヴァルメーダ神？

青い光りを見ているうちに、身体が熱に支配されていく。伸ばされた手を掴んだら、そのまま引き寄せられて抱きとめられた。

熱い吐息が混じった。

二人は何か熱に浮かされたように、互いを貪った。エディアールの手が、王女に触れる。その接触はやさしく、そして熱かつた。

やがて熱が過ぎると、一人は何も言わずに肩をよせあつた。

部屋の中は暖かかつたが、やはり互いに素のままでいるのは抵抗があつたので、二人はシーツに身をくるんでいた。

b王女の剥き出しになつた肩には、彼の手が乗つていった。熱はもうなかつたが、それでも充分彼の手は暖かかつた。

お互ひ何も言わない。じつと、像の前にある蠟燭の炎を見ているだけだった。

……これは本来、あるべきことではなかつた。

二人は判つていた。何かが別の力が介入して、それが後押しして

なった結果なのだ。誰のせいでもない。

王女と神官は、恋人同志ではなかつたが、この時この場だけは、互いものだつた。

それで、何も言わず、何も喋らず、ただ寄り添つていた。  
最後の逢瀬であるかのように。

王女は神官の意外と逞しい肩にもたれ、ぼんやり思つた。  
きつと明日出会つても、私たちは何事もなかつたように振る舞う  
だらう。……何事もなかつたことにしてしまうだらう。そして、二  
度とこのことに触れることはないだらう。

それでも、今は、今だけは……。

契りを交わした男に抱かれながら、王女はそつと哀しみの吐息を  
ついた。

## 第三章 海辺の国の中 5（後書き）

一応ラブシーンだけど、全年齢の枠は超えてないですよね？ ね？

「やれやれ、すっかり寒くなりましたなあ」

神殿の中庭のテーブルを囲んで、空をふと見上げながら老神官は言つた。

「そなたは年を取つてゐるからな。せいぜい氣をつけろ」

王女は憎まれ口をたたく。

久々に昼間の神殿を訪れ、元大神官と現大神官と二人、優雅にお茶をいただいてゐる時のことである。

「女王様こそ、夜のお忍びで風邪をめしませぬよう、お氣をつけあそばせ」

老神官も負けてない。そんな一人を尻目に、歴代のうち最年少で大神官の地位にのぼつた若者は、何事もないように、カップに口を付けてゐる。

はたからみれば、眼福といえる光景ではあった。

だが、交わされている会話は麗しいものではない。品のよい老人と絶世の美男美女の居る中庭には、遠慮したのか怖じ氣づいたのか、誰も近づいてこないので、彼らの会話に妙さには気づくものはいなかつたが。

「そういえば、大神官殿の片腕のパリスは、長期の休暇を取つているとか……」

老神官は、ふと話を無口な若い神官の方へ向ける。

力チリと小さな音をたててカップを置くと、エディアールは相変わらずの無表情で答えた。

「ええ。レイナンテーに行つてます。つい昨日、手紙が来ました」「で、いつごろサリアと帰つてくると?」

と尋ねたのは王女。

「サリアの両親に了解は得たのですが、しばらくそちらの方に滞在すると書いてありましたから、帰つくるのは……しかもサリアを

連れてくるのはもつと後になるでしょう。いろいろと準備もあるようですし

「式はこちちらで挙げるのか?」

「その予定のようです。その時は私に祭祀をやらせるとも言つてました」

「……私もその時は参加できるか? もちろん、身分がバレないよう、変装していくが……」「できるのではありませんか?」

答えたのは、若い神官ではなく老神官。

彼は王女が毎夜どこへ通つているのか知つてゐる。だからこそ、王女もエディアールとその話題を話せるのだ。

「パリスは殆ど天涯孤独だから、式の参加者は基本的にはそのサリアとかいう娘子の親戚縁者でしょう。まあ、神官仲間はどうか判りませんが、それらの者はそうたいして女王様の顔を「」存知ではありますまい」

「そうか。パリスの知り合いだという触れ込みで行けばよいのだな」「それはまずいと思います」「

淡々と答えたのは、若い大神官。

「周りがみな男なのに、貴女一人が女性とくれば、妙な勘織りされることでしょう。こちちらで知り合つたサリアの友達とするのが妥当です」

「……そのとおりだな。事実、そうなのだから」

この若い大神官は世間に興味がないくせに、妙なところで人心に聰いところがある。

他にも他人に全く関心がないのに、そのくせよく観察しているところがあり、どこか矛盾を感じさせるのだ。

もしかしたら、その矛盾こそがエディアールという人間を作っているのかもしれない。王女はふとそんな風に思った。

パリスとサリアの話題はそこで一段落し、あたりは心地よい沈黙

に包まれた。

しばらくお茶をすすつてのんびりしていると、不意に思い出した  
よつて老神官がにやつと笑つて言つた。

「さう。結婚で思い出しましたが、女王様のその問題の方はどうな  
つておりますか？　まだ求婚者たちは諦めませぬか？」

王女はびくりと目を細めた。

「半分は諦めたようだ。ようやく下火になつて今は落ちついている  
一番熱心だった方は？」

「……ヘルウェールの馬鹿のことか？」

女王は不機嫌そうに言つた。ふんつと鼻を笑う。

「しばらく来ないな。……ふん、一生城に来なければよいのだ。顔  
どこのかあやつの名を聞くだけで気分が悪くなる」

不機嫌を露にして、王女はお茶をぐびつと飲んだ。

その王女らしからぬ反応を見て、老神官は首をひねり、若い神官  
は顔をそのまま田線だけ王女の方へとやつた。彼がすぐに元に戻  
したので、王女はそれに気づかなかつた。

王女があの晩思つた通りに、一人は何事ないよう振る舞つてい  
る。

もはやあの夜のことは消えてしまつたかのようだ、王女もいつも  
のようお忍びに現れだし、神官の方も相変わらず淡々と祈りを述べ  
ていた。

……しかし、王女は、あの晩以降、彼の祈りのわずかな変化に氣  
づいていた。

いや、エディアール自身も気づいているのだろう。

変わらず優しくて、懐かしくて、静かな不思議な感覚の祈りでは  
あつたが、その旋律はより力に溢れ、王女の心を包んでくれるよう  
だつた。

深みが増した、とでも言おうか。

……それは、祈り手自身の心の現れでもあつた。

時と同じように、誰の心も、静かに静かに、そして少しづつ変化がおどぞれてきている。

その静かに流れる時の中での、王女の身体にも、ある変化が起つていた。

王女が自分の身体の異変に気づいたのは、あの夜から一ヶ月近くたつてからのことであった。

食欲がなかつた。それに微熱も続き、身体全体がだるく感じられた。

そのことに、王女自身が訝しげに思うのと同時に、王女の身体の不調について最古参の侍女が勘づいた。

「女王様」

食事を前にして、気分が悪くなつてしまつた王女に、水を差し出しながら今年二十八歳になる侍女は言つた。

「いつたい、どうなされたのです？ 最近、女王様は変です……」

「…………ああ…………」

どうなされた、と聞かれても、王女自身何がどうなつているのかわからないのだ。

具合が悪いのは、女王としての激務に疲れが出たせいだと思つていた。

「忙しいからなあ。すっかり体調をくずしてしまつた。そなたにも迷惑かけるな」

「いえ…………でも、王女様、疲れていると想つのなら、夜出歩くのはお止めください」

侍女がはつきりした口調で言つので、王女はびっくりしてしまつた。

今まで噂になつていたが、直接お忍びにつけて言つてきた者はいなかつたから。そして、侍女が叱るように言つたから。

「ただでさえ大変な実務をこなしておられるのに、睡眠時間を削つて夜出歩くなんて、体調をくずして当然です。もうお止めください」

「…………」

女王が顔をしかめて黙つてしまつたので、侍女は他の侍女を下が

らせ、女王の私室に一人きりになつた。

「女王様。私が初めて女王様にお仕えしたのが、十五の時。女王様は五つでした。それ以来十年以上、私は女王様にお仕えし、女王様と共に生きてまいりました。……私はいつでも貴女様の味方です。なにがしようと、護つてみせますわ。女王様。仰つてください。一體、毎晩どこへ行かれるのですか？　何をしているのですか？」

「悪いようには致しません。力になります。他の者には黙つています。……女王様つ」

.....

出来るなら、やまっこことなってこと、彼女を「女心せせしめたい。

しかし、それは嘘になる。

一度、たった一度だけ、王女は信頼を裏切るようなことをしてしまった。

老神官は、女王を信じている、と言った。皆も信じているから、何も言わないのである。

……なのによ

と鼻の頭が痛くなつた。涙が出るになる。

その様子を見て、侍女は目を見開いた。こんな王女は今まで見たことがなかつた。

それゆえに、王女の身に起きた事全てを知つて、力になつてあげたいと思つた。

女王様おおしゃれてお願ひです。私が

王女は顔をあげた。

こんなに心配してくれる人間に、嘘はつけないと思つた。

それに、老神官同様、王女は彼女を信頼していた。

それで、王女はぽつりぽつりと話しだした。初めて会った時のこ

と。サリアのこと。祈りのこと。そして……あの夜のことを。侍女は、ヘルワールのことを知つて、ひどく憤慨したようだつた。

「許せませんわ。あの男。女王様を、女王様を、事もあらうか、襲うだなんて……！ それで、何ともなかつたのですね？」

だが、彼女は王女と若い神官のことは怒らなかつた。やさしく笑つて、

「だつて、女王様は、あの方の事お好きなのでしょう？ 好いた方と結ばれたのを、何で怒りましょうか？」

王女はその言葉にあやつく涙が出そつた。  
そして、女王として、こんなに優しく頼もしく、自分をもりたててくれる人達が傍にいてくれたことを感謝した。それには、当然、老神官の事も含まれている。

「女王様があの方と結ばれるのに、何の障害はありませんわ。この国では国王の伴侣は貴族から、という法律なんてありませんものね。現に女王様の母君は、普通の庶民でしたもの」

突然侍女の話が、あの神官との結婚にまで至つてしまつたので、王女は慌てた。

「ちょ、ちょっと待て。私とあの男は別にそんな仲なのではないぞ？ それに、私自身、彼を男として意識しているのか判らないんだから」

「いいえ、女王様はあの方のこと愛しておられます。そうでなければ、なぜあの方が、女王様にとつて特別なんですか？ 女王様がお好きだから『特別な』なのでしょう？」

「…………そり、なのか…………？」

「はい。…………でも…………」

笑つていた侍女は、そこで少し顔を曇らせた。

「…………ここで問題なのは、女王様がその方をどう思つてているのかでも、あの方が女王様をどう思つているのかでもありません。……女王様の、最近の体調のことです。私は結婚しておりませんし、当然

子供もいないんですけど…………」

その台詞で、王女は侍女が何を懸念しているのかが判つた。

「ま、まさか……？　いや、だって、あれ一度なのに……」

思わずお腹に手をやる。

「一度だって、何だって出来るものは出来ますわ。…………ずっと食欲がないんですね？　微熱はあるし、身体がだるいのですよね……？」

心配そうに、でも諭すように侍女の言葉にて、王女はぎゅっと両手を握りしめた。

懷妊。

あの神官との、子供。

胸が締めつけられる思いだった。

「……私、お医者様連れてきますわ」

意を決したように顔をあげ、部屋を慌てて出ていく侍女を見送り、

何かの予感にそつと身体をふるわせる王女だった。

「大神官様。大神官様はおられますか？」

エディアールの元にその報が届けられたのは、仕事が一段落し、部屋に退去して夜の礼拝の準備をしようとしている時だった。

「どうしたのです？」

やけに慌てた声だつた。しかもそれは女性の声。

神殿ならともかく、宿舎に女性が入つてくるのはめつたにない。宿舎の中でも一番大きな部屋である自室から出たエディアールは、警備に両脇を押さえられながらも懸命にこようとする女性の姿だつた。

面識のない警備の兵には判らなかつたが、若い神官はその女性に見覚えがあつた。

女王の侍女だ。

「……大神官様っ」

「あ、エディアール様、申し訳ありません。制止も聞かずにこ女性が飛び込んでしまつて……」

「大神官様、女王様が、女王様が

女性の目には涙が潤んでいる。

「その方を放してあげてください。……さ、こちらへ……」

神官は、彼女を自分の部屋へと招き入れた。

応接室は別にあつたが、何事か尋常ではないことが起つたらしい。

部屋の戸を閉めて、エディアールは言つた。

「あなたは女王様の侍女ですね？ 一体何が起つたのです？ 女王様の身に何か？」

畳みかけるように問い合わせながら、その口調は静かである。

その冷静な声に、侍女頭は多少落ちついたらしい。

城からここまで少しでも早く着こうと馬を飛ばしてきたので、息

をつく暇がなつかつたのだ。女王の身も心配だつた。

侍女は息を大きく吸つて言つた。

「女王様がご懷妊なされました」

「…………」

エディアールは目を見開いた。

とつさに言葉も出なかつた。

この男がこれほど驚愕したのは、後にも先にもこれ一度きりだろう。

この侍女は、感情の薄い男の世にも稀な表情を見ているのだが、そんなことが彼女に判らうはずがない。

侍女は続けて言つた。

「それが判つたのは、三日前のことです。知つていたのは、私と女王様と医者だけでした。……けれど、ついさつき、具合が悪いのに今日一日無理されて、女王様はお倒れになつてしまわれた。……会議中でです。……皆様に知られてしましました。……それで……」

侍女は喘ぐように言つた。

「私、女王様から密かにあなたのところへいつて、女王様のお言葉を伝えるようにと命令されて、ここに來たのです。……もうすぐ城からこの神殿にも、女王様ご懷妊の知らせと、城への招集の使者が来るでしょ。それで……」

侍女は氣を落ち着けるように大きく息を吸い込むと、まっすぐティアールを見た。

どんなに理不尽に思つても、主から託された使命を果たさなければならなかつた。

「女王様の伝言というのは……あなたは来るな、との事です」

「……何、と言いました？」

ピクリとティアールの眉が動く。

「来てはならない。というのが、女王様のお言葉です。……女王様はあなたを巻き込みたくないのでしょ。そして、どんなに大臣方に詰問されても、女王様は決してあなたの名は出しますまい」

「…………」

「……私は女王様が心配なので、これから城へ戻ります。お願いで  
す……女王様のお心、わかつて差し上げてください」

それはつまり、来るな、ということだ。

けれど、侍女の目には悲壮感が漂っている。

「それで……よいのですか？」

若い神官は静かに問うた。

口では来るな、と言いながら、彼女の目は女王を助けて欲しいと  
いう心情を訴えていた。

今頃女王は大臣たちに父親について尋問されているだろう。  
子供をかかえ、女の身でどれほど心細く思っていることだらう。  
それを救えるのは、女王の想い人であり、お腹の子の父親である  
彼しかいなかつた。

問われた侍女は、しばらくエディアールの顔を凝視し、不意に目  
から涙をこぼした。

「……お願いです、お願いです！ 女王様を助けてください！」

その声に重なるように、表から声が聞こえた。

「ああ、『隠居様！』

「大神宮様には今、お客様が……」

「今はそれどころではない。一大事じや。……エディアール、エデ  
ィアール、中に居るか？」

ドアの外で老神官らしくない、慌てている声がした。

彼の元にも、女王の懷妊が伝えられたのだ。

「居ます」

ドアが開くと同時に、老神官がすばやく押し入ってきた。そして、  
バタンとドアを閉じる。

口を開こうとした老神官は、部屋にいた先客に気づき、一瞬驚い  
たようだった。

「……その様子だと、もう知つておるな？」　　御子の父親はそ  
なただらう。そなたしかおらん」

「ええ、そうです」

エディアールはあつさり肯定した。

その淡々とした素直さに、勢い込んで来た老神官は気が抜けたよ  
うな表情になつた。

「……それならなぜ、こんな所でぐずぐずしておるのだ。今どんな  
に女王様が心細く思つているか……。自分のした事の責任はどうね  
ばならん」

「わかつております。そう、わかつています」

言いながら、ふと彼は空にその青い瞳を向けた。

何か遠くのものを思つてゐるようだつた。それは女王のことに違  
いない。

ドアが叩かれた。

「大神官様。城より緊急の使者が参つておられます……」  
老神官と侍女ははつと顔を見合わせる。

「どうやら、來たようですね」

「落ちついている場合ではないぞ。エディアール」

「……しかし、慌ても始まりません。使者に会いましょう。お一  
人も来てください」

そうして侍女と元大神官を伴つて、宿舎より神殿へおもむく。

その途中、懐かしい顔が現れた。

「エディ。ただいま。今帰つたわつ。あたしたち始め、てつきり礼  
拝堂にいるものだと思つて、そつちに行つてしまつたのよ。……あ  
ら？」

「大神官様……じゃなくて、『隠居様？』　何かあつたのか？」  
サリアとパリスだつた。

まさしく千客万来といつところだ。

「帰つてきたのですか、二人とも。丁度よかつた」

エディアールはにつこり笑つた。

それは花が綻ぶような笑みであつたし、何か含みがあるような笑いでもあつた。

パリスと老神官はぎょっとしたよに凍り付いてティアールを見つめた。

偽りだらうと本物だらうと、彼の笑顔といつ不可思議なありえないものを見てしまったからだった。

## 第三章 海辺の国の中Ⅱ（後書き）

サリアは偽のティアールの笑顔を見慣れてるので、驚きません（笑）

王女にとつては、目覚めたら大騒ぎになつていた、という感じだつた。今回のことば。

確かに無理しすぎたようで、胸がムカムカしていまし、具合もあまりよくなかった。それでも我慢したのだが、いつの間にか、倒れてしまつたらしい。

目が覚めたら、みんな青いか赤いかのどちらかの顔をして、王女の事を見ていた。

そして、状況判断の出来ない王女に向かつて、開口一番、

「父親は誰ですか？」

「どういうことですか？」

というような意味の事を、いちどきに言つた。

バレたのは明白で、女王は途方にくれながらも、唯一事情を知つてゐる侍女に、若い神官の元へ行くように密かに命じた。

彼の名を出すつもりはなかつた。

子供まで出来てしまつたのだ。否応なく大臣達は彼を王女の伴侶とするだらう。彼を国王とするだらう。

しかし、国王と大神官の地位は兼用できないのだ。彼は神官を止めざるを得なくなる。

王女は、それが嫌だつた。

彼には何時までも神官でいて欲しかつた。

いつまでも、神の前でのやさしい祈りを捧げていて欲しかつた。

「…………」

「女王様。おっしゃつて下さい。父親は、誰ですか？ 誰なのですか？」

「…………」

「陛下。父なし子なんて、國民に示しがつきません。どうぞおっしゃつてください。女王陛下」

「…………」

女王は沈黙を続けた。どんなに問われても、何を言われても、けつして口を割らなかつた。

ずっとそのまま平行線がつづく。

「そんなに言えない人物が、父親なのですか？」

「城では、男が近づくことなんてあり得なかつた。噂では、女王様はよくお忍びをなさつていたとか……。その時の子なのですね？」

「まさか……行きずりの男との……？」

「陛下、いつたいどこへ行つてらしたのです？」

といった、屈辱的な質問にも、じつと耐えて沈黙を守つていた。

エティアールとその一行は、城へついてもまつすぐ会議の間へは行かなかつた。

「まさか、こういうことになつていたなんて……」

「今三カ月か……。といつことは、俺たちが出発してから、幾日もたつていない時だな」

のんきな恋人たちは、この事態を純粹に楽しんでいるようだつた。二人は、女王と神官がこの上は、結ばれるのは当然としていた。

「そなたたちは気楽だのぉ」

「本当に……」

あまり事態を楽観視できない残りの一人は、しかし心の中ではどうにかなると思つてはいるようだつた。

当人たちの心はあまり問題ではない。

周りがどういう反応を示すのか、それがどういう結果になつているのか、それだけが今のところ不安な材料となつてはいるだけである。

二人の懸念通り、会議の間では、今、多少やつかいな事態が起きていた。

いや、やつかいだと思ったのは王女一人だけであつたが……。

あのヘルウェール・サヴァーーがやってきて、なんと父親の名乗りをあげたのだ。

「ちょうど、今から一月ほど前の時です。女王はお忍びでいらっしゃいました……。森のことです」「

などと平氣でそんな事を言つ駄に、王女は憎々しげな視線を浴びせた。

これにはさすがの彼女もだんまりを決め込むわけにはいかなかつた。

「それは違う。……いや、確かに違わないが……お前ではない。突然襲つてくるような奴に、誰が身をまかせようが……」

しかし、今まで何も言わなかつた王女が、ムキになつて否定するので、逆に大臣たちは本当の事ではないかと思いはじめていた。

「その時、女王はランプを落とされていつた。これがそのランプです」

そう言つて、彼が掲げたランプは、間違いなく女王の部屋のランプである。

王女はぎりぎり唇を噛みしめた。

あの夜の屈辱が再びよみがつてくる。首すじや胸に触れた、あの男の感触。

……隙をつかねば逃れられなかつた、あの悔しさ。

それらが全て蘇つてきて、今ここに刃物があつるものなら、王女は間違いなくあの男を刺していただろう。

しかし、今はそんなものではなく、男の虚言を止める手だてもない。

「間違いありません。私が女王のお腹の子の父親なのです」

宣言するよつて、高らかにヘルウェール・サヴァーーは言つた。

その横で、父親のサヴァーー伯はほくほくと喜んでいる。自分の息子が国王となることを考へてゐるのだらう。

「冗談ではない……！　あの男と連れ合いになるくらいなら、死んだほうがましだ……！」

王女が、再び否定の言葉を口にしようとしたその時、会議の間

にりんとした声が響いた。

「それは違います」

驚いて視線を転じると、そこには老神官、パリス、サリアと、そして王女付きの侍女を大勢従えた大神官エディアールが立っていた。

「大神官殿、遅刻ですよつ」

大臣の一人が、叱咤する。

発言したその大臣に軽く会釈をすると、若い神官はそのよく通る声で言った。

「申し訳ありません。多少、用意するものがありますて……」

彼は微笑んでいた。優雅に、そしてどこか冷たく。

目を見開いて、彼の登場に驚いている王女に、若い神官は微かにうなずいてみせた。

王女と曰があつてている時だけ、彼の微笑みは、やさしさが溢れていた。

エディアールは、つと視線を王女からヘルウェールに移すと、笑みはそのままに淡々と冷たい口調で告げた。

「御子の父親は、そこにいらっしゃるヘルウェール殿ではありますん」

美貌の神官の登場で静まり返っていた会議の間が、ふたたびざわめいた。

「……では誰だというんだつ」

わめいたのは当のヘルウェールだ。

彼の言つたことは、この場にいる誰もが問いたい言葉だった。

「私です」

また静まりかえつてしまつた場の中で、その様子にますます笑み

を深めて、若い大神官は言った。

「皆様、信じられないような顔をしていらっしゃいますね。……もう一度言いましょうか？ 女王様の相手は私です。私がその子の父親なのです」

その場にいる全員が、目を丸くした。唖然となつた。

だが、一番びっくりしたのは王女だった。

彼にここに来ないようになに言つたはずだったのに。

なのに、いつの間にか帰ってきていたサリアとパリス、老神官や自分付きの侍女たちを連れて入ってきて、自分が子供の父親であることを宣言した。

こんな事態は想定してなかつた。

なにがなんだか判らずにサリアの方に視線を転じると、それに気づいたサリアは小さく手を振つてくれた。

かすかな安堵と共に、胸の奥がじんわり暖かくなつた気がした。

「しょ、証拠はっ！」

愕然としながらも、ヘルウェールは言った。

そんな彼に、エティアールはフツと笑つてみせた。

「証拠、ですか？……私自身ですよ。私自身がそのことを知っています。覚えていてます。そして、女王様の宿つている命が、その証です」

ゆるぎのないその言葉と口調に、ヘルウェールは押し黙つてしまつた。

パリスが一步前へ出た。

「皆様。女王様が毎晩行っていた場所とは、大神官殿のところです。私と私の婚約者であるサリアも何度かご一緒いたしました。誓いました。たしかに女王様でした。……これは証拠の一つになりませんか？」

「そうです。何度も何度もご一緒にしました」

とサリア。

「女王様がお忍びをしていたことは、私たち全員が証言します」  
侍女たちがうなづく。

大臣たちは、ことの成り行きを黙つて見守つていた王女と、そして問題のエディアール大神官を交互に見た。

二人は彼らにしか分からない視線を、じつと交わしていた。

数々の証言より、それが何よりの証明であった。

「女王様、おめでとうございます」

「間に合つてよかつたですわ」

「多少は役に立つたかな？」

「石頭たちの、監督不行き届きの文句は、この爺が引受けます。」

「ゆるりと」

王女の私室を出る際の、それぞれの言葉である。

一人きりになつた王女と若い大神官は、互いに何やら言いたいことがあるのに、どう言葉にしていいのかわからず、押し黙つていた。けれど、やがてエディアールが、沈黙を破るように言った。

「……私には生まれつき妙な力がありました。手を触れず物を動かせたり、時に他人の心が聞こえたり、と……。けれど、私が一番妙だったのは、私には人の言うような感情がなかつたのです。皆が笑う事でも、おかしくなかつたし、悲しいという思いも、憎いとか、悔しいとか、とにかくそういう感情が欠落していました。父は、人間としては不完全であるが故に、失つた感情のかわりに力が授けられたのだろうと言いました。もしくは、その反対で、力を授けられたからこそ、感情を失つたのだと。……母親は私が他人と違うことを嫌がり、私にこう言い聞かせました。人が悲しい顔したなら、そういう顔をしなさい。笑つたら、お前も笑いなさいと。小さい頃はそうしていました。もう少し大人になつた時は、この力と感情のせいで人と確執がおこらないように、常にやさしく接し、笑みを浮かべていると言われました。表情だけの、表面だけのことなら、たいた苦痛でもありませんでしたよ。自分が他と違つていることは判つていたので、私はそうしました。けれど、ある日、突然、疲れてしまつたのです。……おかしいでしよう？ 感情は欠落していたのに、疲れは覚えなんて。でも……だから、神殿に入りました。今度はありのままの自分でいようと。現に私はそうしてきました。」

…そして、あなたに会つた

若い神官は、窓のところへ歩いていつて、振り返つた。

「あなたは、強かつた。その気性のまま熱く、激しく……あなたを取り巻くその強い感情に、私は圧倒されました。けれど……そんなあなたは同時に脆さをも内包していた。あなたを知つて、そしてあなたが私の祈りに救いと安らぎを求めていることを知つて、ある日、私はあなたが氣の毒だと思つた。あなたの強さと脆さを知つているからこそ、私はあなたに哀れさを覚えてしました。……誇り高いあなたは怒るかもしれないけれど、私にとってはそれは天地がひっくり返るほどの衝撃でした。人並みに誰かを氣にしたり、他人に対しても何がしかの感情を覚える気持ちがあつたのですから……。私はあなたに同情しています。あなたを、氣の毒と……哀れだと思つています。そんな風に言つたら怒りますか？」

王女は首を横に振つた。

この神官が他人に覚えた“氣の毒だ”という感情が、どれだけ稀有だということを知つていてるから。

「あなたに感情を覚えるからこそ、私はあなたの力になりたいと思います。今回のこととは……子供のことは、誰のせいでもありません。神官風に言つなら、ヴァルメーダ神が定めた運命なのでしょう。だから私は別に迷惑ではありません」

「……いいのか？」

王女はぽつりとつぶやいた。

同情とか氣の毒とか、普段だつたら怒るようなことも、腹立たしいとは思わなかつた。反対に、そこまでこの男が自分を氣に掛けてくれた事を、嬉しいと思つた。

「ええ。……あの夜。あなたと契りを交わした日から、あれがたとえ、自分たちの本意ではなかつたとしても、ずっとあなたのために、あなたとあなたの守る国のために、祈つてきました。これからも……私はあなたのために祈りましょう」

相変わらずの淡々とした表情。

だけど王女はそこに寛へるやしない何かの感情を見出した。

王女は、彼に近づいていった。

そして前に立ち、彼の胸にそっと頬をよせて、

「私は女王だ」

と言つた。

「そのようにずっと生きていた。私に護りはないらない。私と国を守らうとしてくれる男なんて、いらない。国を守るのは、私だ。わたしがするべきことだ。……だから、国王なんて、いらない」

エディアールは王女の細い身体を応えるように抱きしめた。

「私は国王になんてなりませんよ。私は神官ですから。役目は女王様の補佐です。そして、あなたの伴侶として、あなたのために祈りを捧げることです。……あなたはこの海辺の國の女王で……」

王女は抱き合ひ、身体から伝わる振動とともに、彼の言葉に心を傾けた。

「……私は、あなたの神官です」

言葉はやせしく、懐かしく、王女の心を揺さぶった。

それは、彼の祈りだった。

王女だけに捧げる。

彼だけの祈りであった

。 こうして、金の髪と青の瞳を持つ若い神官は、女王の伴侶となつた。

## ヘルローゲ（前書き）

本編（王女と神官）にはあまり関係のない、裏話的な話になります。

## Hペローグ

ポロン。ポロン。

「『七ヶ月後生まれた王子は、やがて成人して王位を継ぎ、両親の友人夫婦の間に生まれた一歳年下の娘を妻に迎えた。彼の何人かの弟妹たちも、みなそれぞれに幸福をつかんだ。若い一組の夫婦は、齢にして四十にも満たないうちに亡くなつたが、その時ですら、彼らの美貌と若さが衰えることはなかつたという……。それは彼らが、神の国の守護者である神々に寵愛されたからだとも、また、彼らが神々の化身であつたからだとも言われている。しかし、彼らの血はこの地に受け継がれ……神に選ばれた美しい王女と彼女の愛する神官の恋の物語も、果てることはない…………』

これは、昔の話。

今はもうない、神に選ばれた国の中の王女の話

銀色の青年は一通り終えると、拍手喝采を受けながら、酒場を出ていった。

後に残つた男たちは、長い長いその話を思い起こして、

「……結局、女王と神官を結びつけたのは、ヴァルメーダ神だつたのか？」

「それより、どうしてあの妙な神官にそんな力があつたんだ？」

「女王様だけに彼の祈りが判つたのは何故だ？」

口々にそういう質問がでたが、答える声はなかつた。

しかし、彼らの居る酒場の、はるか頭上では、その質問に答える声があつた。

その声の主は、話しに出てきた神官に勝とも劣らない美貌を持ち、銀色の髪と深い青色の瞳をしていた。

彼は何もない空で佇み、下の酒場を見下ろしながら、

「……少し、後押ししただけですよ、私は。見ていて、少し焦れつたかったから」

くすくす笑う。

「あの二人はね、結ばれるべきだつた。あの、私が祝福を与えた国での、最後の私達の化身だつたのですから。いとしい私の妻とのね

……」

青年の身体がふわりと、上昇する。高く、高く。  
手に持つていた豎琴は光へと転じ、夜の闇に光を添えて、散つていいく。

「今宵は精靈祭の日。今は誰も知らない、誰も覚えていない、精靈の集いし日。そして……神の降臨する日……」

……あなた方は想像もしないのでしょうか……。あなた方のいるところが、かつて美しい王女のいたかの国であつたことを……神に選ばれた国であつたことを……。

我が友、アルフエールよ」

青年はふと淋しげな微笑みを浮かべた。

「建国のおりの誓約通り、君の血脈が絶えるまで精靈の加護によりこの国は繁栄した。

……だけど、君の言つ通り、始まりがあれば終わりがあるのはこの世の理。私もそれは否定しません。だからこそ、君の国は滅びた。君の血脈という最大の加護を失つて。

……でも友よ。君の魂が還る場所が失われたことは、私と妻にとつて魂の一部を無くしたことに等しいことだ。……それでも君は、これも必然のことだと笑うのでしょうか？」

彼はその青い双眸を空に向けた。

見えない何かを探しているようであり、懐かしい何かを思い出しているようでもあった。

でもそれは少しの間だけで、彼はすぐにまたあの華やかな笑みをうかべた。

酒場の明かりと、その喧騒を見やりながら、その姿が夜の闇にすうつと溶けていく。

残るは、光の残照。

「それでは皆さん。  
私の物語は楽しんでいただけましたか……？」

〈完〉

ヴァルメーダ・この世界を司る最高神の一人。

銀髪・青い瞳の青年の姿として現される。海辺の国で広く信仰された神。

友であり、義兄であるアフルエールとの誓約により、彼の国に加護を与えていた。

しばしば魂と力の一部を与えた人間（化身）を降臨させている。

アレリー：精霊と人間の間に生まれた娘。

精霊の長であるアフルエールの妹でもある。

ヴァルメーダに見初められ、妻となつたことで神格を与えられる。

金色の髪に金の瞳を持つ。

兄の魂が転生するための母体として、しばしばその血脈に降臨すると言われている。

アフルエール：精靈と人間の間に生まれた青年。アレリーとは兄妹。

強大な力を持ち、長として精靈を束ねる。

同時にヴァルメーダから託された大地に住む人間を束ねるために国家を建設。

その初代国王となる。

だが、半分人間の血を引く為に、その命には限りがある。そのため、自分の血に連なるものに精靈の加護を与えるように誓約を立てた。

何代も経て、その血が薄まる頃になると誓約に従つて自分の血脉に転生してくると言われている。

## Hピローグ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました！

本編はこれで完結です。一応。

このあと少し小話を入れたいと思います。

何しろ、Hピローグは本編といつより裏話的な話でしたからね。  
神様サイドのお話というか……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1561n/>

---

海辺の国の王女

2011年6月27日10時55分発行